稱讃する聖詠の言聞えたり。遂にアファナシイハ發放詞を唱ひければ人民ハ各〻散ドて家ヨ歸れり。アファナシイハ人民の出で去るを俟ち居りしが已ヨして皆散ずるに及び神品等は之を擁して遁れしめけるヨ時偶〻暗夜にして市中雜沓しければ幸ヨ之を追跡する兵士の手を免れたり此后アファナシイは暫く市中又は郊外に潛み居りしが遂に友人の助けヨ由りて曠野に遁れたり

アファナシイは曠野の間ヨありて安全なりき。當時埃及の荒漠たる山野平原とアレキサンドリヤの四周ハ皆修道士隱遁者の住む所となりしが彼等は皆深くアファナシイヨ心服し名聲の曠野ヨまで轟ける眞理の毅然たる保護者を死を以て守護せんと決心せり。兵士は修道院及隱遁者の庵舍を搜索せしも其甲斐なく修道士は常に四方ヨ目を注ぎ危難の近づくを見れバ之をアファナシイに急報して更ヨ遠く遁れしめたり

アファナシイは斯の如くヨして窘逐者の手を遁るゝこと殆ど六年なりき。此間大主教は曠野の生活を愛し勞を執り乏きを忍び多年嚴格の行をなせる隱士も其克己の行を見て驚嘆し深く衆人の尊敬する所となれり

此時皇帝はアレキサンドリヤに命を下し正教徒の聖堂を悉くアリイ黨の手に付さしめ堂內より聖器物聖台聖幕主教座等を取出し不淨物として之を聖堂の門前ヨ燒けり

此に於て正教徒は恰も異教人より窘逐せられたる時の如く夜間洞窟ヨ集りて祈禱せしヨ兵士は亦之を襲ふて捕ふる所の者は悉く之を拷問に付し且刑ヨ處せり。アファナシイの友人ハ教會の事情を以てアファナシイヨ報道しアファナシイハ絶えず教會の事に意を注ぎ事ある毎に曠野より答辯を爲しければ信者ハ喜んで一々其言を受け僞教を駁する

の好武器となせり。此の如くアファナシイハ曠野よりありながら教會の爲よ力を盡し而して眞理は强迫壓制を受けたるよも拘はらず蔓延確定せり。主教の中教會に背きたる者あるも人民は背かずして其保護者たるアファナシイに心服せり。此大災難の時よ際してアファナシイの毅然たる擧動は基督教會の爲よ好摸範となれり

第十二　修道

修道の創立者聖アントニイ。曠野に於ける修道院。
聚居修院の創立者大パホミイ。聖イラリオン。
西方に於ける修道の嚆矢

隱遁幷よ修道業の創立者を聖アントニイなりとす。アントニイハ二百五十一年埃及に生れたり。其家富貴よして両親共に敬虔熱心の基督教徒なりければ幼より其子に信仰を潔白に守り心を邪惡よ染ましめざらん事を慮り聖書を讀み祈禱を爲さしめ以て其靈魂を恩寵を受くるよ備へたり。アントニイ齡二十歳になれる時両親ハ世を去りて大なる財産と讓り受け唯一人の幼少なる妹を慮るの外係累なかりき。アント

ニイは通常血氣の際より耽ける所の娯樂より其心を惑はされぜ其想像する所全く他より在りて其の未だ知らざる所の生活より其心を引かされ彼の意志と希望は悉く曠野より於ける修道の事業より傾けり

一日アントニイハ聖堂より至るの途にて曾て聖使徒等が主より從はんとして萬事を打棄てたる事を思念し已にして聖堂より入りしより『爾完からんと欲せば往きて爾の所有を售りて貧者に施せ、さらば財を天より有たん且つ來りて我より從へ』(馬太十九の二十一)と云ふ福音の言を聞けり。アントニイハ此言を聞くと俱より神の恩寵乍ち其心に觸れ此言を以て主より親しく已より云はれたるが如き思を爲し夙より主を熱愛せし己の靈魂の傾に從ひ家に歸りて直に其財産を鬻ぎ以て之を貧者より施せり

アントニイハ『來りて我に從へ』と云ふの言を聞て主より從はんと決心せしも幼少なる妹の事を思ふて暫く躊躇せしが翌日聖堂より至りしより再び『爾等明日の事を慮る毋れ蓋し明日ハ明日の事を慮るべし一日の苦勞ハ其日より足るなり』(馬太六の三十四)と云ふ福音の言を聞きて大に悟る所あり遂に己の知れる敬虔なる婦人より其妹を托し家を棄て一身を犧牲として唯一の主より事ふるの決心を爲せり

修道の創立者たるべき天命を受けたる聖アントニイハ修道者の大なる師となるより先だちて自ら悉く神靈的の生活と實驗せり初めアントニイハ一老人に就き其の謙遜なる門弟となりて師と爲るの事と學び后二十年の間曠野より隱遁し自身の經驗を以て人力の劣弱なる事と神の寵佑の遠からざる事とを研究せり。アントニイが此の二十年の間より堪え忍びたる所の辛苦ハ譬ふるよものなく具さに飢渴寒暑の苦を忍びたり。然れどもアントニイの言より依るに隱士の尤も恐るべき誘惑ハ其心にありて即ち此世に對するの煩悶と意思の錯乱は最も恐るべし

と爲せり。アントニイが既に此の内心の戰ひを爲すの力盡きたりと思ひ疲れ果てたる事數々なりしが主い異象に於て其心を勵せり一日尤も烈しき誘惑を受けたる后主之に顯われけれバアントニイい呼んで『仁慈なる耶蘇よ爾い安くよ居り給ひしや爾い何故最初に來りて我の苦難を止め給いざりしや』と云ひしよ主之よ答へて曰く『我此よありて爾が功を立つるを俟てり』と。又或時アントニイい思意の乱るゝを制するに苦み呼びて『主よ我い救を得んと欲するも意思い我として之を得せしめず』と云ひしよ俄に己に彷彿たるの人机よ倚り坐して勞働するを見たり。彼勞働して后起て祈禱し祈禱し終りて復た勞働し后復祈禱せり。是れアントニイよ諭し其心を堅むるが爲よ遣いされたるの神使なりき。神使アントニイよ告げて曰く『爾も斯く爲せ、然らば救を得ん』とアントニイい畢生此奥妙なる教訓を記憶し之を以て其心を奮勵する

源となせり

アントニイい自ら神靈的生活を爲すの困難なるを實驗すると共よ又神の佑助の近きよあるの喜をも實驗し完全なる祈禱の言ふ可らざる味を悟り神靈的の寶を心よ貯へ他人に正道を指示するの大任を帶びて隱遁所を出でたり。アントニイの世よ出るや人皆其容貌を見て驚けり。光陰い殆ど彼の身に影響せざるが如く疲勞の跡毫も見えず其顏い快活婉麗よして恰も聖神の恩寵よて照されたる潔白なる靈魂の反映するが如くなりき。アントニイは久しく人々と隔離せしも粗暴殘酷とならず群を爲して來り訪ふ者よ應接すること頗る鄭寧懇切なりき。其容貌全体よは一種異樣の色ありたるを以て初め彼を知らずして曠野に來り之を尋ぬる者は多くの修道士の間よ直に之を看分けたりとぞ

アントニイは信仰の異能にて病を醫し言を以て憂愁者を慰め無智者

に諭し人の怒を和らげ衆人に殊更主耶蘇を愛すべきを勧めたり。アントニイの言ゝ神の恩寵の盤ゝ和せられたるを以て曠野ゝ來りて之が教を請ふ者の心を感動すること深く此世の生活を厭ひてアントニイと共ゝ隱遁の生活を爲さんと決心せし者多く其門弟日に月ゝ增加して無人の曠野は恰も神使の集ひる樂園の如くなれり。何となれば隱士等ゝ其心の潔白なると俗世の事を捨てたるとに由りて其生活ゝ已ゝ人間の生活ゝ非すして神使的の生活なればなり。或は居を同うして團体を爲すものあり或ゝ洞窟ゝ散居して隱遁の生活を爲す者ありたるも皆大アントニイの教導ゝ從ひ唯一の泉即ちアントニイの口より出づる教訓ゝて已の靈魂の渴を醫せり。アントニイは修士を教導するゝ當りて之が爲め一定したる規律を設け(規律ゝ后世必用の起るに由りて設くべかりしな.り)門弟と談話すること恰も父の子に對する如く

にして之ゝ謙遜にして神と隣を愛する事を勸めたり。後アントニイゝ數篇の教訓を書せしが皆現時に傳ゝれり。其中に云へるあり曰く凡そ全心を以て神に向ゝんと欲するの心ある者にゝ神必ず自ら之ゝ如何にして祈禱すべきやを教ふ。聖神ゝ人の敬虔の熱心なるに應じ即ち人自ら寵佑の必用を感じ之と受けんと欲する熱心の度ゝ應じて其佑けを遣ゝすなり。汝等及ぶべき丈祈禱し朝夕及び日中ゝ聖詠を歌ひ且つ常に聖書を手にすべし。惡意を懷く勿れ。惡意を懷かざる事は永生の源なり。生死共ゝ隣ゝ關係す。汝若し兄弟を得ば則ち神の愛を得ん。凡そ自ら祈禱すると認めて之を記臆する者の祈禱ゝ完全の者にあらず主曰へり天國ゝ爾等の衷ゝあり(路加十七二十一)と是れ即ち德ゝ吾人の衷に在りて之を得るゝゝ唯吾人の意旨を要するのみ。己の靈魂を主の創造せしが如く潔白ゝ守るゝ乃ち德を全ふするものなり。吾人ゝ宜しく靈魂を

主より受けたる賜として之を守り主に其造物と認められんことを勉むべし

マクシミン帝の窘逐の時アントニイハアレキサンドリヤに出て窘逐を受くる者に供事して屢〻危難を冒せり。然れども窘逐の已に止むよ及んでアントニイハ己の受けんと欲せし致命の冠ハ己に預定せられざるを悟り再び曠野に避け其の元住ひし所より更に遠く避け一高山の洞窟ヨ居をトし其傍ヨ一掬の地を耕して穀物野菜を植え人が已ヨ食物を運び來るの勞を省き且つ來訪者の爲ヨ貯へんとせり。人民ハ群をなしてアントニイの許に來り就中虐げらるゝ者多く來りて之が保護を請ひ皆其助を得たり。コンスタンティン帝及び其諸皇子の如きもアントニイの交際を求め其祈禱を請へり。アリイ派の紛爭起りし時アントニイ及び其修士等ハ堅く正教を守りアントニイの再びアレキサン

ドリヤに出でたる時ヨは正教勝利を得彼の教を聞き信ドて洗禮を領けし者多かりき

アントニイハ百五歳の高齢を保ちて世を去れり。聖アファナシイは其の逝世の數日前來りてアントニイの創立したる修道院ヨ身を匿せしが其狀を見て頗る驚嘆せり。彼れアントニイを評して曰く『山上ヨ建てられたる修道院は恰も神聖の人々ヨて滿たされたる聖堂の如く聖詠を歌ひ聖書を讀み祈禱禁食儆醒して己の望を來世の幸福ヨ措き世を避け驚嘆すべき愛を懷きて光陰を送るの人々にて充されたり。彼等は怨恨爭論の何たるを知らず他人ヨ害を加ふるの念慮なく唯互ヨ德を以て人ヨ勝れん事のみを競へり』と。

聚居修道の創立者ハ聖大パホミイなり。聖パホミイハ天性英敏ヨして両親共ヨ異教人なりしが幼より之に高等の教育を授けたり。三百十二

年ゑコンスタンティン及びリキニイゑ對して反逆を企てたるマクシミン帝の軍ゑ加はり戰場ゑありて勞を取り苦を忍ぶの間ゑ基督教徒等が其師の誡に從ひ慈愛を以て戰場ゑ苦しむの敵を遇するを見て深く感ぜる所あり未だ救主基督を知らぜして之ゑ祈りしが軍より歸るゑ及んで洗禮を受け曠野ゑ隱遁して一隱士パレモンと云へる者に就き其教導ゑ由りて救を慮れり。斯くパホミイハ世を避けて神靈的の功を積む事十有五年なりしが箇々單獨の生活を爲すの隱遁者を一定の規律の下ゑ結合せん事を企て尼羅河の一島(タウェンナ)ゑ修道院を立てたりしゑ聖パホミイの教導に從つて救を得んと欲する者陸續此ゑ來り一修道院ゑ之を容るゝこと能はざるゑ至りければ更ゑ尼羅河の畔に數多の修道院と彼此相隔てゝ立てたり。パホミイハ別ゑ女修道院を創立し己の姉妹を以て其院長となせり。パホミイハ修道院ゑ一定の規律

を設けて一般に之を守らしめしが其規律の大要は貞操を守る事、謙遜たるべき事、此世の萬事を捨つべき事、阿爸(父と云へる義にして修道士の長を云ふ)に唯々諾諾として服從すべき事の四ヶ條なりき。修道士ハ一舍ゑ三人づゝ同居して偕に業を營み偕に食事を爲し日ゑ數回相集りて祈禱し其服を一樣ゑせり。公祈禱ハ毎日晝夜二回之を執行し喇叭若くは打鐘を聞くと共ゑ無言ゑて聖堂ゑ集り聖書を讀み長者の教訓を聞き祈禱し聖詠を歌へり。日曜日ゑは隣村より司祭來りて聖体禮儀を行ひ修道士ゑ領聖せしめたり。修道士ハ列を整ひ默々として己の院長と共ゑ出てゝ勞働ゑ服し長者の降福なければ何人も新ゑ勞動ゑ着手し又ハ安りゑ甲所より乙所ゑ轉ずるを得ざりき。凡そ修道士等の勞働して得たる所のものハ其勞働者に屬せぜして共有物となれり。食事ハ一日ゑ一回日中ゑ於てし其食物ハ穀物野菜菓物ゑして日曜日ゑは晩餐を設けたり。聖パ

ホミイは修士をして必ず此等の規律を遵守せしめんとし修道院ゑ入らんと欲する者あるも一年の間試驗せし后に非ざれゞ之を受けざりき。此の如き規律ゑ基きて起れる修道士の仲間ゝ聖バホミイの生時其數既ゑ七千人ゑ達し彼の死后百年后ゑゝ五萬人ゑ達せり

聖アントニイの門弟の一人聖イラリオンは其故郷バレスティナゑ修道の業を傳ヘガザの近傍ゑ修道院を創立せしが之よりして修道はバレスティナ及びシリヤに傳われり。又聖大ワシリイは學業を卒へて后パレスティナ及び埃及の修道院を歷訪し歸るゑ及んでカパドキヤゑ修道院を起し之ゑ一定の嚴則を設けたりしが後ち此規則ゝ東方修道院の一般ゑ採用する所の者となれり。又第五世紀の隱遁者なる被聖者サワ(被聖者と稱ふるゝ修士ゑして司祭の位を有せしが故なり)はイエルサリムの近傍ケドロン河畔の巖の上ゑ修道院を建て之ゑ嚴格なる奉神禮

の規律を設けたり。又歐羅巴ゑゝオリンプ山幷ゑアホン山に修道盛んゑ起れり。(アホン山ゝ延長七里半直徑五里ありて現時修道院二十、庵舍八百、修道士の數八千人ありと云)

東方よりして修道ゝ西方に傳われり。聖大アファナシイ羅馬ゑ居る時聖大アントニイの傳記を著ゝせしゑ之を讀みて其修道の行ゑ傚ゝんと欲する者多かりしが後ち西方教會の著名の師福イエロニムゝヒワの聖パウェルの傳を著ゝして同く敬虔の人々ゑ之に傚はんと欲するの望を起さしめたり。是ゑ於て羅馬の貴人ゝ男となく女となく此世を避けて曠野ゑ隱遁し閑靜の生活を爲す者多かりき。されど西方ゑ修道を創立組織せし者ゝウェヂディクトなりとす。ウェヂディクトゝ西方の修道ゑ一種特別實際的の方針を予へたり。彼ゝ修道士ゑ東方の修道士の負擔せるが如き究乏を負擔せしめず唯之ゑ秩序節制及び勞働を命じ且つ書籍

を謄寫する事を以て修道の勞働の一となせり。是よ由りて諸聖父の書幷に古代の史蹟よりしてウェヂディクトの創立したる修道院の壁よ存し后世よ傳へられる者甚多し

修道ハ教會史上幷よ人類の神靈的發達上よ取りて至大の關係を有す

修道士等は實よ高尚なる德義の完全を求めんが爲めよ此世を避けたりと雖も彼等の此世に對する影響ハ亦至大なりき。修道士輩が此世の事物に心を煩ハさゞ超然たる生活を爲すを見て世人ハ基督教徒の天より命ぜられたる本分の如何なるやと其眞正の故鄉の安くよ在るやを知るを得たり。爪に隱遁者等の生活及び苦行の風評を耳、よし其教を聞き慰藉の言を聞かんとして來る者頗る多かりき。敬虔熱心の輩ハ隱遁者の世よ稀なる生活を見んとして四方より群集し而して其の來り訪ふ者ハ皆啻に彼等より敬虔の事を學びたるのみならず他人に之を

物語り其言行を記して世よ傳へたり。聖なる勤行者等の言行錄ハ實に基督教徒の爲よ道德の教課書及指導となれり

修道士等ハ基督教徒の神靈上よ助けを予へつゝ亦此世の究乏をも助けたり彼等ハ自ら勞して食を求め其餘分を以て貧者に施し修道院の側よ旅宿を設けて旅人を接待し之よ食を與へて休泊せしめ且つ獄中よ呻吟するの囚人、飢饉若くは其他の災難よ遭ふて困苦する者をも濟へり。此の如く修道士ハ信者の身靈の幸福に益すると俱よ基督教を播傳し異教を絶滅するよ與かりて力ありき。修道士の高尚なる生活ハ異教徒をして驚歎せしめ基督教の神聖なる一証となれり。修道士等は異端者の跋扈する際よ顯はれ侃々として有司有權者の教會幷よ正教よ叛くを譴責せり。教會の牧師は修道士等の敬虔なると其の心靈上の智よ富めるとを見て之を神品に登庸せしが后世よ至り益々修道よ重き

を置きて最上の神品職たる主教の位より初め專ら修道士を以て之に任じ后遂に之に限る事となせり。然れども修道の至重至大の功勞は彼等が斷えず教會の爲め國家の爲め生死者の爲めに祈禱し幷に聖奉神禮を完全壯嚴に守るの一点にあり

第十三　大ワシリイ幷に神學者グリゴリイの幼時

彼等の教育及び友誼。　グリゴリイの母聖ノンナ。

二人の雅典に於ける生活及び隱遁

大ワシリイ及び神學者グリゴリイは同時に教會の重任を盡せり。彼等は幼少の時より天緣に由りて終始相俱にせしを以て二人の名は教會史上にも同時に記載せらる。

二人俱にカパドキヤに生れ、偖にケサリヤの有名なる學校に於て教育を受け、偖に雅典に於て其業を卒へ、偖に摸範に基づく家庭教育の影響の大なるを實驗せり。大ワシリイ及び神學者グリゴリイは共に其両親に倣ひて幼少より其両親の慕へる彼世の義と美とを愛し人生終極の

目的ハ此世ヨあらずして尽きざる寶を藏する彼の世ヨあるを感覺せり。

大ワシリイの家族ハ皆夙に熱心教會に事へたるを以て名高かりき。其父ハ有名なる能辨學の教師ヨして熱心の基督教徒なり。其母、エミリヤハグリゴリイの母聖ノンナ幷にアウグスティンの母聖モニカと均しく後世ヨ基督教徒たる婦女の則るべき好摸範を垂れ聖人の列ヨ加へられたり

グリゴリイの家族も亦敬虔と以て顯われたり。其父ハ初め異教人なりしが其妻ノンナの祈禱ヨ由りて遂に眞神を信ずるヨ至れり。彼未だ如何にして祈禱するやを知らず又未だ大闘の聖詠をも暗んぜざりしヨ一夜夢に自ら『我に語りて主の家に往かんと云ふ者を樂む』と云へる不可思議の歌を謳ふを夢み其心俄に爽快を覺えたりしが翌朝果して欣

然として神の家に入りて洗禮を受け初め司祭ヨ擧げられ后主教となりて畢生教會ヨ務めたり

聖グリゴリイの母ノンナハ其子の精神上の教育ヨ益を爲せし事尤も多し。グリゴリイハ常ヨ其母を以て恰も已の生命の守護神使の如き者となし彼の祈禱はその望むが如く已を守るの効力あると感じたり。聖ノンナハ災難ヨ遭ふ毎ヨ祈禱を爲して其災を避くる事を祈りけるヨ主は之ヨ其祈禱の實効あるを信ぜべき大なる喜を與へたり。聖ノンナは鋭敏活潑剛毅全力を盡して已の務を行ひ又夫ヨ對してハ常に温良順從ヨして其善事を助け凡そ困苦する者ハ皆之を憐み貧困者を助けんが爲ヨハ己の身と己の子を鬻ぎて奴と爲すをも甘んずべしと云へり

グリゴリイハ説教に於て聖ノンナの性質を述べたり。グリゴリイの母、

に對する愛情に其困難なる生活の上に顯はる彼母の事を謂て曰く『彼の此世に居るに唯此世の生活を以て在天の生活に備ふるが爲めのみ』と

聖グリゴリイの一身に再度の誓ありて神の務に獻せられたり。初度の誓に歡喜極まる時に致されたり。彼の母に子なくして神に子を賜んことを祈りしに其祈禱効驗ありしかば母に手づから其子を携へて聖堂に至り赤子の手を聖書の上に置き之を聖として司祭と爲す事を預定せり。后に至りて聖グリゴリイに此事を謂て曰く『神に我を祈禱せる潔白なる我母に賜ひ母よりして已の悅ぶ禮物として受け給へり』

再度の誓に生命よりも貴き者の悉く海底に沒せんとするの恐るべき時に致されたり。聖グリゴリイに雅典に航する時暴風起りて二十餘日の間打續き四面暗黑となり電光微に閃きて恐るべき光景を呈せり。此

時グリゴリイに未だ領洗せざるを以て今其身を淸められず唯靈水を渴望する者として此世を去らんことを恐れたり。彼曰く『我と同舟の人人に皆通常の死を恐れたり。されど我が靈の恐怖に其幾倍なるを知らざりき』と。此に於てグリゴリイに流涕祈禱して神若し其の亡びんとするの靈を救ひ給へば一身を惟一の神に獻せんとの誓を爲せしに主に己の敎會を堅うするが爲に必要なる此少年の生命を禮物として受けたり。祈り終るや海上俄に穩かになれり。グリゴリイ謂て曰く『我に苦心せしに我が両親に我と共に心を苦め夢に於て彼等に我と悲を分ち遙かに祈禱を以て我を助けたり』と。グリゴリイに實に己の救ひれたるに全く此祈禱の力に由るとなせり。之に由りてグリゴリイに深く感動し己の身を以て神に獻じ此時より自ら已に屬せざるものと思へり。

竹馬の友なるワシリイとグリゴリイに再び雅典に於て遭遇せしが彼

等の友誼ハ一の微火より化して炎々たる焔となれり。雅典の都たる見るもの聞くものとして耳目の誘ひとならざるなく曲學盛んに行はれたるを以て彼等の友誼ハ此都に於て特に貴かりしなり。彼等が欣然自ら基督教徒と稱し此名稱に勝る者なしと信じて其心を動さゞりしハ此友誼あるが爲めなり。彼等ハ孜々として業を勵み堅く其信仰を守りたれども異教社會に於て美なりとする所の者ハ亦之を擯斥せざりき。グリゴリイ謂て曰く『たとひ世に迷謬に由りて天地及び空氣の如きを神とし神の造物を以て神に易へたる者あれバとて吾人ハ此等の造物を蔑視す可らず乃ち吾人ハ凡そ美妙なるものを以て自ら樂み造物に由りて造物者を悟り聖使徒の言ふが如く吾人の思慮を基督に從はしめざる可らず』と

ワシリイハ雅典に居る事五年にして國に歸りしがグリゴリイハ卒業

の后雅典に止まりて能辨學の教師となれり

ワシリイ國に歸りし時ハ其父已に此世を去れり。鄉人ハ之に其父に代りて學校の教師とならん事を勸めしもワシリイハ固く之を辭し彼ハ此時恰も十字街頭に立ちて孰れに方向を取るべきやを知らざる者の如くなりき。ワシリイハ學博く殊に能辨に長じ之を以て自ら樂めるを以て動もすれバ夙に其心に熟し來れる思想に異なるの方向を取らんとし躊躇決せざりしが洗禮の機密を受くるに及んで其疑始めて解け神の恩寵其心に觸れて遂に己の身を神に献じ修道の生活を爲さんと決心せり

當時小亞細亞に於ハ修道の業未だ起らざりけれバワシリイハ親しく曠野の生活を爲す者の狀態を捜らんとして埃及及びパレスティナに旅行を企てたり。ワシリイハ到る所隱遁者の高潔なる行を見て深く心に感

する所あり歸るゝ及んでイリサ河岸の閑靜なる絶佳の地に居をトし聖書の研究に從事せり。ワシリイは其友グリゴリイに送るの書に謂て曰く『神は我に我が心に適ふの住所を示し我をして我が汝と夙に屢々想像せし所の事を實際に見るを得せしめたり』と。ワシリイは此場所を稱して天に達するの梯、已の橄欖山なりと爲せり

然れども

ワシリイの生活は永く人々より隱るゝを得さりき。初め再世と交るを好まざりしが世人が切に己を慕ひ有力者として己より生命の言を聞かんと欲するを見て之を愛するの心勃然として起れり。是に於て其傍に來り住むの隱遁者日に加はりて修道院起り後幾何もなく又

ワシリイの指導に由りて男女の修道院建立せられたり。此等の修道院は安穩靜寂なりければ困難の時代に恰も茫々たる曠野に於ける水源の如く孤兒、貧困者を始め老となく幼となく壯となく此世の生活

の無常を感じたる者幷に未だ知らざる世の娛樂を捨てたる者は皆此の閑靜の神聖なる場所に隱遁せり。

ワシリイは元來實際的の愛を顯はすを以て本意となせしが故に殊に彼等の事を慮り且つ已の創立した

る修道院の爲に此の實際的の愛に基づきて規律を設けたり。彼れ謂て曰く『吾人の神を愛するの誠を受くると俱に亦之を愛するの力を得たり。凡そ神を愛する者の亦必ず隣を愛す。而して凡そ隣を愛する者の亦必ず其愛を神に及ぼす。何となれば神の凡そ人に對するの仁慈を已に對するの慈憐として接くれば

なり』と。

グリゴリイの此時已に雅典より歸り居りしを以て

ワシリイの屢〻之を招げり。

グリゴリイの已に知識の渴を醫せしを以て閑靜の地に避くるを望みしが決心を爲すに先だち

ナジアンズに歸るに及び領洗の準備を爲せり。

グリゴリイの洗禮を以て已の既往の諸罪を洗滌する生涯

の一大事件と見做し之を受くるゝ依りて始て己の得たる所の知識學術才能等を悉く神の寶座に献ぜるを得べしと思へり。彼謂て曰く『思想を言顯はすの天賜なる言い我が貴ぶ所の者の一なり。然れども之を貴ぶゝ專ら神言の役者たるが故なるのみ』と。グリゴリイゝ夙に此世を避けて默想的の生活を爲さんと欲せしを以て修道の業に從はんとせしも兩親を愛するの厚きより其念を制せり。グリゴリイ謂て曰く『此愛い恰も重荷の如く我を此世に引付けたり。否これ雷愛情のみならず憐憫の情即ち白髮を憐み憂愁を憐む吾人の靈魂の美なる感情なり』と。

グリゴリイゝ老年の父母ゝ侍して之が杖となり之を以て自ら神の悅ぶ所の事を行ふと爲せり。ワシリイと俱ゝ居る事い夙ゝ其の望む所のことなるも其貴しとなせる父母の爲に此念を絶ち只暫時其友を訪ふて鬱蒼たる森林、潺々たる清水の流るゝ間に樂しき月日を送れり。后二

人い此時を以て一生の最も幸福なる時なりとし共に祈禱し聖歌を謳ひ聖書を讀みたるの樂と神の奥義を了解するが爲ゝ其心を照されたる事と日々勞を執り乏きを忍びたる事を記憶せり

ワシリイも亦其の所謂『我が心ゝ適ふの生活』を爲して樂むこと久しからざりき

ワシリイ及グリゴリイい共ゝ傑出たる人々ゝして『爾等の光い宜く人人の前ゝ照し彼等をして爾等の善行を見て天ゝ在す爾等の父を讃榮せしむべし』(馬太五の十六)と云へる基督の言は誠ゝ彼等ゝ當れりとす

第十四　背教者ユリアン

ユリアンの即位。ユリアン異教を保護し基督教徒を窘逐する事。聖アファナシイと對する窘逐。イエルサリム聖殿恢復の効なき事。波斯と軍を出す事并にユリアンの崩御。アファナシイの逝世

コンスタンチイ帝崩ずるに及んで一時アリイ黨の權勢衰へたりしが一災難來りて異教徒より意外の窘逐起れり。然れども此窘逐に久しき亘らず唯基督教が如何に其根基を堅めたる歟又將に絶滅せんとするの異教を恢復するの計畫が如何に無効無智なるやを示すに止まれり

コンスタンティン大帝に幼年の甥二人ありガルル及びユリアンといひ共に幼稚なりしが大帝の死後コンスタンチイン基督教徒を以て之が師傅となし監督を嚴にして之を束縛せり二人ハ長ずるに及んで洗禮を受け后教會の唱經者とせられ基督教の儀式を嚴守し常に齋みし致命者の墳墓に詣ふて聖堂に献金寄附する等の事を命ぜられたり。然れども其師傅たるアリイ徒ハ自ら之に基督教の道德の摸範を示す能ハず之に福音の教の精神を傳へ基督及び聖教の誡を愛するの情を惹起さしむる事と慮らざりき之に反してガルル及びユリアンハコンスタンチイの時代に於ける教會の紛爭と牧師の互に嫉惡陷擠する有樣并に皇帝の教會に對する壓制殘酷の所爲を目擊せしを以て教會を愛し之を重ずるの心を起す能ハざりしハ當然なり

虛弱無能なる長子ガルルハ夭死せりユリアンハ天資銳敏なりしが幼

より基督教を惡みたり彼れハ學術研究の爲め希臘及び小亞細亞を歷遊して深く古代の學術と異教の哲學を修め自ら之れに完全の智慧ありとなせり。ユリアンは常に神主に交はり遂に全く之に左右せられ洗禮を取消し其身に偶像に獻じたるの血を注ぎて異教の洗滌式を受け密かに異教の神に奉事する者に加へられたりユリアンハ勢ひ公然自ら異教人たる事を明言する能ハす詐りて其眞情と主義とを隱蔽せざるを得ざるよりして基督教を惡むの念益々募れりユリアンハ雅典に於て恰もワシリイ及びグリゴリイの遊學せる學校に通學せしが此に遊學するの間全く其心を異教に傾けたり

コンスタンチイ帝俄かに崩ずるやユリアンハコンスタンティン家の惟一の血屬者として帝位に昇れり

異教徒ハ悅びて再生の思を爲せしが果して間もなく異教徒が有力熟

心の保護者を得たる事判然せりユリアンは基督教を排斥し異教を恢復するを以て畢生の目的となせり。

ユリアンは即位の后間もなく自ら希臘及び羅馬の諸神の尊信者たるを公布し命じて國中の諸府に異教の神廟を開かしめ先きに基督教徒の破壞せし所には新に基督教徒より其費を徵して之を築かしめ自から異教の祭禮に與かり大神主の稱を以て皇帝の尊稱よりも名譽なる者尊き者なりとせりユリアンは常に異教の哲學者及び詭辨者等と交り自ら博識なるよも拘はらず異教に迷信し卜筮幷に呪詛を信じ偶像に獻じたる牲畜の肝腑に由りて未來を判知するを務め異教の諸儀式に與かるを以て頗る名譽の事なりとし夜間起きて偶像に祈禱し朝起るや先づ其の特に尊信せし所の太陽を祭り而して後事を執れり

然れども ユリアンは異教を革新し其弊を洗滌するに非ざれバ勢力を

保つこと能はざるを知れり基督教ハ世に潔白なる道德の好模範を示し之を信仰せざる者と雖も敬服感嘆し異教徒の風紀紊乱せる有樣ハ心ある者をして皆慨歎ゑ堪えざらしめたり。故ゑユリアンハ先づ基督教固有の廉潔及び德義の精神を以て異教ゑ移さんとし神主たる者ゑい公衆の遊興に臨むを禁じ其行を潔白ゑして節制を守り人民ゑ勸善懲惡の說教を爲すを命じ神殿の側ゑ旅館及び醫院を造らしめ國庫の金を以て之が維持ゑ充てたり彼謂て曰く夫のガルリヤ人(基督教徒を指す)は啻ゑ己の貧困者を養ふのみならず我等の貧者をも恤むは我等の愧つべき事なり』

ユリアンは此の如く異教の弊害を洗滌し其位置を高むる事を務むると同時ゑ基督教徒ゑ對して最も狡猾なる事を行へりユリアンは公然之を窘逐せゞ反て其臣下たる者は自ら認めて眞神と爲す所の神を拜

すること自由たるべしと布告し其即位の初め流竄せられたる者は悉く召還し彼等をして再び爭論を起さしめ以て基督教を賤しむるの一助と爲さんとせり、ユリアンは當時公會場幷に軍旗より悉く基督教の記號を除去し到る所ゑ異教の神像を建て且つ演說及び文章を以て機會ある毎ゑ基督教を嘲弄せり加之ならゞユリアンは曾て基督教の神品に予へられたるの特權を剝ぎ遺言を以て教會に献金するを禁ぜり又基督教の學校ゑ於て古代の學術を研究する事を禁じ基督教徒の師たる者自から智を以て傲らず愚と質朴とを以て傲ると爲すが故ゑ基督教徒たる者は只聖書を研究すれバ足れりと云へり

然れどもユリアンの首として惡みし所の者ハ基督教を奉ずる庶民にあらゞして民間ゑ尊敬せらるゝ教會の有名なる首魁及び牧師たる者なり就中當時正教幷に教會の大保護者と公認せられたる大アフナシ

イを惡みたり

アファナシイハアレキサンドリヤを放逐せらるゝ事六年にして歸りけるに全市其到着を祝すること恰も祭禮の如く當時の人之を以て基督のイエルサリムよ入る時よ比せり市民ハ老幼貴賤を問ハず皆歡呼して聖歌を唱ひ感謝の祈禱を爲しつゝ出て之を迎ひたりアファナシイハ直に爭論にて亂されたるの信者社會に和平を恢復する事に着手し寛嚴の處置を以て基督教徒の間に相愛の情を起し混亂紛擾の際に正教よ背きたる者の罪ハ概ね之を寛宥するを勉めたり

ユリアン怒ること甚くアファナシイのアレキサンドリヤよ歸りしより未だ一年を經ざるよ之にアレキサンドリヤを去るべき命を傳へ皇帝の裁可を得ずして再び其教座を占むるの權なしと宣告せり。アファナシイハ直にアレキサンドリヤを去りしが正教徒ハ皇帝よ主教を返さん事を請願しけれバユリアン益々〳〵怒りてアファナシイを埃及國外に放逐すべき命を下せりユリアンハ尙之を以て滿足せずアレキサンドリヤの重なる聖堂を毀ち且つアファナシイの埃及よ居るを發見せバ之を殺すべき命を下せり基督教徒ハ涙を垂れて其愛する主教を送りしよアファナシイ之を慰めて曰く『汝等哭する勿れ是れ微雲のみ彼忽にして過ぎ去らん』と。かくてアファナシイハ信者よ別を告げ小舟に乘りて尼羅河を溯りフィワイダを指して行けりユリアンの命を受けたる兵士ハ之を殺さんとして追跡せしが殆ど其舟に追付かんとせし時アファナシイハ俄よ命ト て舟を返さしめ兵士等の乘込める舟よ接しけれバ思ひ掛けなき兵士ハ其のアファナシイたるを知らずして之よアファナシイの去る尙遠きかと問ひけるよ主教の仝行者之よ答へて若し急航せバ速に追付くを得べしと云へり兵士ハ之を聞きて舟を行りしかバアファナシイ

ハ上陸して曠野の隱遁者の間に隱れたり

ユリアンハ種々の方法を以て基督教を卑しめ縱令欺騙を以てなりとも基督教徒を異教の儀式ヨ導き入れんとし偶像に獻せし牲畜の血を以て市場ヨ鬻ぐ所の食物ヨ沃ぐを命せり。時、偶〻大齋の初めの週間なりしが一夜コンスタンティノポルの主教に聖致命者フェヲドルテーロン顯れ之ヨ告げて曰く『爾ハ基督教徒に市場にて買ひたる者を食ふを禁せよ而して食物を苦へざるものハ小麥粉に蜂蜜を加へて之を煮るべし』と。此時よりして大齋の初の週間に聖致命者フェヲドル、テーロンを記憶するが爲め糖餅を聖堂ヨ携へ來るの習慣起れり

ユリアンハ猶太人が基督教徒を惡むを知りて特ヨ猶太人を庇護し其宗教及び儀式の如き特別ヨ之を保護せり

ユリアンハイエルサリムの聖殿を再興し之を以て基督教徒に一大攻擊を加へ聖殿の破壞ヨ關す

る預言の僞りなるを証せんとせり聖殿を恢復する事ハ不幸なる猶太民の常ヨ好んで想像せし所ヨして古代の聖所の恢復すると俱ヨ其國の盛大を來さんとするを信じけれバ喜んでユリアンの勸めを納れ其國の再び獨立せんとするを空想しつゝ相率ひてイエルサリムに至れり猶太人ハ國王の保護を受くるを恃みて到る所基督教徒ヨ侮辱を加へ之を苦しめ其宗教を罵詈誹謗せしがイエルサリムヨ於てハ猶太人の侮辱を加ふる事最も甚しかりしを以て基督教徒の狀態ハ殊ヨ困難を窮めたり

斯くて工事ヨ着手せしヨ漸く荒蕪を一掃し建築の材料を運ぶや否地忽ち大に震動し剩へ暴風起りて悉く木材を散し工夫ハ多く砂石の中ヨ埋められたり此ヨ於て暫く工事を中止し再び着手せしに又前よりも恐るべき地震起り前の地震にて殘れる基礎石ハ地より堀出され器

械ハ旋風にて吹飛され火煙地より起りて工夫を焼殺せり猶太民之を見て恐れ其企業の神の旨ヨ逆ふを悟りて工事を廢し信ドて洗禮を受けたる者多かりき

ユリアンハ日耳曼人及び波斯人との戰ハ遂ヨ利あらずして生命を失ふヨ至れりユリアンハ大軍を率ひて波斯ヨ向ひ進軍しつゝ途間必ず異敎の有名なる神殿に詣でゝ献祭を爲し占者に問ひ破壞せる異敎の神殿にハ豊ヨ修繕料を寄附し歸途嚴ヨ之が落成式を行ふべきを約せりユリアンハ初め戰の利あるヨ乘しイフラト河を濟り充分勝を期して舟を焼き進んで深く敵地に入りしに要害の塲所ヨて不意ヨ波斯人ヨ襲ハれ敵の矢ヨ射られて重傷を負へりユリアン死ヨ臨み失望の餘り其傷より流れ出る一塊の血ヨ握り之を空中ヨ抛ちて『ガリレヤ人ヨ爾ハ勝てり』ヨ叫べりヨ云ふ

是れ實ヨ三百六十三年の事なり兵士ハ其將を失ひたるを以て新たに皇帝を選べり

ユリアン帝位ヨ在る事二年を出でず彼ハ此間基督敎を絶滅するが爲め充分ヨ力を尽せしも其計畫ハ反て基督敎の勢力の大なる事ヨ異敎の衰へたる事を証せり世人が已に基督敎の高尚潔白なる法を知るヨ及んでハ異敎ハ既ヨ其生を保つ事能ハざりしなり。基督敎徒ハ此窘逐ヨ由りて實際に一致ヨ相愛の勢力の大なるを知りて益々密切に和合するヨ至れるを以て此窘逐ハ彼等ヨ取りて有益なる試驗ヨ爲れりヨ云ふべし

軍の歸るヨき其陣頭ヨ輝ける十字架ハ國民に新皇帝が如何なる宗敎ヨ属するやを示せり基督敎徒ハ眞ヨ喜べりされども異敎人を窘逐する事なく皆和平を守れり基督敎徒ハ眞理の勝を得たるを喜び牧師ハ

温柔ゑして人を悪む可らざるを教へたり然れども其の喜ぶこと久しからぜして悲みとなり異教徒の窘逐止むや「アリイ」黨の窘逐復た起れり

ユリアンの死せし后アファナシイハ再び安然ゑしてアレキサンドリヤに歸り其主教座に復せしが新ゑ東方の皇帝となれるワレントハアリイ教を奉じ悉く正教の主教を放逐するゑ及びアファナシイも亦放逐せらるゝに至れり此放逐ハアファナシイの身ゑ取り第五回目の放逐ゑして暫時にして止み後ち安然ゑ餘生と送りて死せり(三百七十三年)此正教の大柱石と爭ひし者ハ大半既に死し此時生存せし者ハ其勢力微々たりき

第十五　聖大ワシリイ及び神學者聖グリゴリイ

ケサリヤの主教ワシリイ。アリイ黨の保護者たる皇帝ワレント。ワシリイゑ對するの窘逐及びワシリイとアリイ黨との鬪爭。聖ワシリイの著述。グリゴリイコンスタンティノポルゑ至る。アナスタシヤの聖堂に於ける説教。皇帝フェオドシイの事。コンスタンティノポルゑ第二全地公會を開設する事。聖グリゴリイの著述

アレキサンドリヤの主教聖アファナシイが已に此世を去るに及び大ワシリイハ正教の有力なる保護者となりて能くアリイ教を排し初め廣

大なるケサリヤ主教部の司祭となり后大主教の任を帶びてアファナシイと東西力を戮せ後其大業を繼續せり

ケサリヤの主教エウセウヰイハ困難の時に際し獨り廣大なる主教部を管轄するの難きを知りワシリイを招きて之を司祭と爲し己の職務の一部を以て之に委ねけるにワシリイハ孜々として其職務を執りければ教會治理の權ハ漸次悉く其手に歸し遂に主教の實權を握るに至れり。ワシリイハ日々説教し時としてハ朝夕二回説教せしが來りて其説教を聞く者甚多く工夫をして空しく其手を息まざらしめんが爲め往々説教の時間を短縮せざるを得ざりき

聖ワシリイハ東方に於ける教會の有力なる治理者として史上に其名を輝せりと雖も彼が説教者としての働きハ尤も能く人の知る所なり質朴貧困の民其説教を聽かんとして群集すればワシリイハ滔々懸河

の雄辯を振ひ森羅萬象を觀察して神に其心を向くべきを教へ世界創造の奥義と造物者の仁慈を詳述せりワシリイハ常に神と永世に其心を向けたりと雖も天性柔和想像敏活にして森羅萬象の美を觀察するを以て神に其心を傾くるの方法となせり聖ワシリイハグリゴリイと共に人の心靈を開發し風俗を矯正し憂愁困苦の者を慰藉する雄辯の摸範を教會に遺せり

聖ワシリイの畢生の行を見れば恰も喜ぶ者と共に喜び悲む者と共に悲しむべし（羅馬の二十二）と云へる使徒の誡を實行せしものゝ如し彼の愛ハ常に實行に表れ凡そ困苦災難に遭遇する者を見れば其の何の故たるを問はず皆之に慈憐を垂れたりワシリイ謂て曰く彼等ハ皆均しく慈憐を受くるの權利を有す彼等が吾人の助を仰ぐ事恰も吾人が神の助を求むるが如しと

三百六十八年ニ廣大なるケサリヤ州に大飢饉あり他國より穀物を運ばんとするも運賃甚だ高くして之を得る事難く國中飢饉の災難に遭遇せしが牧師たるワシリイハ民の困苦を以て己の困苦と爲し此災難の年ニ其身を以て衆民の犧牲ニ供せり

聖ワシリイハ行を以て言を以て窮民を救助するを得るの資力ある者の心を動かせり其感動すべき説教の中ニ謂て曰く農夫ハ田ニ坐し膝の上ニ手を束ねて己の子を打眺めつゝ愁然として涙を垂れ次に其妻を注視して慟哭自ら禁えず枯れたる稻穗を動かし且つ之を摘みて一粒をだも得ざれば恰も壯年の愛子を失ひたる父の如く高聲慟哭す…之を見て空しく過ぐる者ハ其罰果して如何ニぞや…殘酷無情豈之ニ過ぐるものあらんや凡そ此災を救ふを得る者にして之を意に介せず且つ貪婪の心に由りて之を傍觀する者ハ兇殺者と其罪を仝ふすべき

ハ誠ニ當然なり』

聖ワシリイハ悉く己の財産を闔ぎ其の得たる所の金を以て飢餓ニ瀕する者に施し凡そ來りて助を乞ふ者にハ老幼の別なく皆之に食を予へたり此の如く聖ワシリイハ人を感動する嚴格なる説教と己の實行とを以て深く富者の心を動かし之をして其倉庫を開き廣く人民ニ施さしめ飢餓ニ瀕するケサリヤの爲め恰も埃及ニ於けるイヲシフの如き者となれり

三百七十一年にエウセウヰイ死するニ及びケサリヤ仝國擧つてワシリイを主教となせり

此時ワレント帝位に在りしが皇帝ハ深くアリイの異端に惑ハされアリイ黨を保護し正教徒を壓制するが爲に其權を濫用し各教會より正教の主教を放逐しアリイ黨の主教を以て之に代ゆるを以て正教の勢

力を滅ぐの良策と爲せり此窘逐の間ゝ在りて博識高德を以て著明なるケサリヤ教會の大主教ワシリイハ自然正教徒幷ゝアリイ黨の均く注目する所と爲れり正教徒ハ之を以て己の保護者となさんとしアリイ黨ハ之を以て己の謀計を妨害する者と見做して之を除かんとせり東方の主權者の勢威を以てするも此の如き燈を動かす事容易ならぎ故ゝワシリイハ其四周の主教座が大半アリイ黨ゝ占められたるも依然として其位を保てり聖ワシリイハ實に福音の精神ゝ適ひたるの主教ゝして衆民の父と爲り困苦憂悲する者の友と爲り其信仰ハ不屈不撓ゝして慈善を行ふゝ當りてハ倦むを知らぎ飽く事を知らざりき

ワシリイの斡旋ゝ由りてケサリヤを始め其四隣ゝ育兒院旅館醫院等起りしがケサリヤの廣大なる醫院の中ゝ始て癩病者の施療室を設けられたり聖ワシリイハ癩病者を憐む事殊に深く不幸ゝして此病に罹

れるが爲め人ゝ厭み嫌ハれ自ら言ふべからざる苦を忍ぶの癩病者を觀る毎ゝ涙を垂れたり聖グリゴリイが曾てワシリイと共ゝ此處ゝ避けたる時述べたるの言ゝ曰く『彼等ハ神に於ける我等の兄弟なり即ち吾人と同等の本性を受け吾人と共ゝ仝じく神の像を賦與せられて之を守るの兄弟なり否之を守るゝ於てハ彼等恐くハ吾人に卓越せん彼等ハ肉身腐敗たりと雖も唯一の基督を衣基督ハ吾人と均しく彼等の爲ゝ死し彼等ハ縱令此世より擯斥せらるゝも天の生命を嗣ぐ者ゝして將來基督と共ゝ榮と受けんが爲め今之と共ゝ苦しむ者なり吾人ハ之を何如ゝすべきか彼等を蔑視せんか彼等を見るも顧みぎして通過ぐべきか將た彼等を死せる者恐るべき者として放棄すべきか否々兄弟ゝ迷へる者をして正道に歸せしめ沈淪者を尋ね弱者を堅むるの善牧者なる基督が己の羊たる吾人ゝ教ふる事決して然らざるなり…且

つ吾人ゝ惻隱の情を賦したる人性の吾人ゝ諭す所も亦然らざるなり』と。聖ワシリイハ癩病者を以て己の兄弟と見做し毫も厭み嫌ふ事なく屢〻之を見舞ふて抱き其愛の厚きを示して大に之を喜バしめたり

ワシリイを稱して大となす所以ハ彼が其全時の人に及ぼせる特別の感覺ゝ由るなり彼の凛乎たる風采憔悴したる蒼顏炯々たる眼光悠然たる温和の擧動ハ人をして恭敬の念を起さしめ莞爾として笑めバ人以て譽めらるとなし默すれバ人以て譴責せらるとなせり反對者ハ彼が德行の勢力ゝ敬服し朋友ハ喜んで之ゝ心服せりワシリイの神品ゝ對する勢力ハ殊に大にして神品の價値ハ彼ゝ由りて大ゝ高められ他州の主教等ハ己の教會の爲ゝ彼ゝ司祭を求めたり

ワシリイハ聖堂を壯麗にし奉神禮の秩序を整肅ゝするを好みたりしが此情ハ頗る人をして感動せしめたりワシリイの傳記中に彼が再び

聖堂に於て奉神禮を行ひし事を記し而して両度共に大ゝ人を感動したる事を記すシリヤの聖エフレムと皇帝ワレントとハ性質全く相異なるの人なりしもワシリイが行ふ所の奉神禮の嚴なるを見て二人共ゝ同一の感情を起せり聖エフレムハ感嘆の餘り謂て曰く我ハ彼が神の家の聖所の階上ゝ立つを見たり我ハ此の選ばれたるの器が己の被牧者の前に立ち寶石の如く輝く言ゝて裝飾せられたるを見たり彼の肩にハ恰も白きこと雪の如き鳩止りて其耳に囁き而して集まれる者ハ皆恩寵の神光にて輝くが如く我ゝ見えたり』と。

又聖ワシリイハ聖堂ゝ於て奉神禮を行ふ時皇帝ワレントと相會せり皇帝ワレントハ諸國を巡視して偶〻サリヤゝ來りしが己と信仰を異ゝする主教を見て之と爭論するを好まず且つ之をして己の說に從ハしむる事難からざるべしと思ハ預め代官モデストを遣ハしてワシリ

イはアリイ黨と交際するを諭さしめんとせりモデストハ皇帝ハ先だちてケサリヤハ到り聖ワシリイを招ぎしハワシリイハ平常の如く從容として來れりモデストハ左右ハ棍棒と斧とを携へたる捕吏を隨ひ威儀嚴然として聖ワシリイハ應對し初めハ禮を厚くして之を遇待し甘言を以て之ハ皇帝の意を奉じアリイ教を是認すべきを諭せしが到底其事の成らざるを見るハ及んで忽ち色を變ひ憤然激怒して聖ワシリイを呼ぶハ主教の名を以てせずワシリイハ爾ハ無禮ハも敢て獨り頑然大皇帝の旨ハ逆ハんとする乎と云へりワシリイハ自若としてアリイ黨の迷謬を奉ずる事能ハざる所以を辨明せしハモデストハ放逐と財産の沒取と死とを以て之を恐喝しけれバワシリイ謂て曰く爾若し能すべくんバ他のものを以て我を恐喝せよ財産ハ無財産の者より之を奪ふ能ハ也流罪ハ我之を流罪と思ハ也蓋し我ハ決して一所に束縛せられざれバなり今我が居る所の地ハ我之を故郷と見做さず我を謫する所の地ハ何處ハあれ我之を故郷と見做す全地ハ皆我が神の地にあらざるなく我ハ唯寄寓者及び賓旅なるのみ爾ハ又決して我を苦しむる能ハ也我ハも殆んと全く我が体なきなり爾ハ毆打を以て苦みと爲すか爾の意の儘に行ふべし死の如きハ我に取りて恩惠とならん死ハ寧ろ速ハ我を導きて我が生活の恃みとする神ハ就かしめん』代官ハワシリイの剛膽なるに驚き未だ嘗て爾の如く我と激論せし者なしと云ひけれバワシリイ徐かハ答へて曰く『想ふハ爾ハ未だ主教と論ずるの機會ハ遭遇せざりしならん』

斯くする間ハワレントケサリヤハ至りけれバモデスト直ハ謁見して主教ワシリイハ論破せられたる事を具に奏上し恐喝も甘言もワシリイの心を動かす能ハず强迫の手段を用ふるの外ハ策なしと云ひける

ヨワレントハ聽き終りて知らぎ識らぎ聖ワシリイを慕ふの心を起せり顧ふに皇帝ハ此時ワシリイの說ヨ眞理あるを悟りたるもアリイ敎を棄つるを耻とせしなり是ヨ於てワレントハ機會あらバ親しく聖ワシリイに面して敬慕の意なりとも之を表せんと欲せしヨ其機會問もなく至れり

偶〻神顯祭（主の洗禮祭のことなり）至りければワレントハ護衞兵を隨ひ聖ワシリイの奉神禮を行へる聖堂ヨ入り正敎徒の間に立ちて祈禱し暗ヨ聖大主敎と意見を同ふするの意を示せり時ヨ聖堂ヨハ人民雲霞の如く群集し立錐の餘地なく肩摩して押合ひしも堂內靜肅に呂律整々たる大祭の唱歌洋々として堂內ヨ響き寶座の后面ヨハ大主敎自から人民に向ひて立ち其眼光の上ヨも擧動の上ヨも皇帝の堂內ヨ在るを認むるを示さぎ其の祭服を着て手に權杖を携へたる有樣實ヨ威儀嚴然として其烱々たる眼光ハ聖寶座ヨ注ぎ其傍ヨ恭しく列を正して立てる司祭及補祭ハ人間と云ハんより寧ろ神使に彷彿たりき

聖役者の狀態の莊麗神聖なると祈禱する者ヨ恩寵の微光輝ける有樣ハ怯懦ヨして感情深きワレントをして深く感動せしめたりワレントが進んて祭壇ヨ近づき戰慄して壇上ヨ奉納せんとせしとき人皆其恐懼の甚しきを認めたり神品等ハ大主敎の意を知らざるより敢て皇帝より之を受けんとする者なくワレントハ逡巡として殆んと倒れんとしければ司祭之を支へたり時に聖ワシリイハ皇帝が傲慢の心を以てせず謙遜を以て奉納せんとするを視て衆民の前ヨ之を辱かしめんヨり寧ろ敎會の規律の嚴なるを和げんと欲し自ら之を受けたり

數日を過ぎて皇帝ハ再び聖堂ヨ來りて聖ワシリイを見其說敎を聽き后ち允を請ふて聖所ヨ入り聖ワシリイと其望む所の談話を爲せり聖

ワシリイハ熱心ヨ正教の眞理を説き時の移るを知らざりしが皇帝ハ耳を傾けて之を聽き聖ワシリイの説の眞理なるを認めたるが如くなりき此時よりワレントハ正教徒を遇すること寛大ヨして窘逐を中止したり

然れども皇帝の寛大の處置ハ久しきを保たざりき數日を經ざるに傲慢なる宮中近侍の人と狡猾なるアリイ黨の主教等ハ巧みヨ皇帝ヨ聖ワシリイを讒して其怒を激せしめけれバ皇帝ハ熟慮せずして聖大牧師を流罪ヨ處する事を命せりアリイ黨ハ喜ぶ事限りなく正教徒の悲み譬ふるヨ物なかりき聖ワシリイハ民をして騒乱せしめざらんが爲め宣告を受けたる日の翌朝未明に立ち去らざるを得ざるに至れり然れども神ハ現ハヨ聖人を保護し其全能力を以て全く事態を一變し給へり。此夜六歳の王子俄ヨ病に罹り危篤に迫りけれバ悉く國中の良

醫を召して之を診せしめしヨ皆其の望なきを述べ皇帝ハ俯伏して熟心神ヨ祈りしも其甲斐なかりき時ヨ皇后ハ恐るべき夢を見て驚き其子を失ハんとするを悲むの餘り俄ヨ入り來りて子の病ハ大主教を侮辱せしが爲ヨ天より遣ハされたるの罰なりと言ひけれバ皇帝ハ深く愧ぢて直に宣告を取消し人を遣して主教の祈禱を請へり大主教の祈禱ヨよりて王子の病癒ねけれバワレントハ再びワシリイを窘逐せ他の諸州にハ窘逐猖獗を極めたるもカパドキヤのみハ安然なりきケサリヤの聖主教ワシリイハ永く此平安を樂むを得ざりき彼ハ間斷なく正教の敵と戰ひしを以て精神大に疲勞し且つ勞苦と不幸ハ其健康を害し遂に神ヨ我爾の手ヨ吾が靈を付すの數言を名殘として世を去れり實ヨ三百七十九年の一月一日なりグリゴリイハワシリイの眠れる時危篤の病ヨ罹れるを以て之に會するを得ざりき

聖ワシリイハ奉神禮を莊嚴美麗ゑする事を慮り大ゑ之が爲に力を竭し莊重なる聖体禮儀の式を定め司祭の聖体禮儀を行ふ時心得とすべき貴重の教訓を後世に垂れ又早課奉事を制定せり其他時課經聖詠經中の祝文幷ゑ領聖規定の如きワシリイの編纂せし所の者多し五旬節の日ゑ跪きて聖神の降臨を祈る晩課禱並ゑ死者の安息を祈る祈禱の順序の如きもワシリイの制定する所なりワシリイの著ハせる書ハ其文極めて流暢婉麗なり聖グリゴリイハ其有名の著書六日説(世界創造の六日説)を評して曰く『我六日説を讀む時ハ恰も造物者と親く相接するが如き思を爲す』と

聖ワシリイハ志氣頗る昂れる人なりしが基督教の謙遜の念を以て辛うじて其の人ゑ秀でたるを自認せる情を挫けり當時の人謂へるありワシリイハ神ゑ對して謙遜ゑしてグリゴリイハ人ゑ對しても謙遜なり』と。グリゴリイ敢て之を辨解せず唯ワシリイの傲慢ハ縱令大なるも彼が至微の兄弟を愛し之を憐むの深きゑ由りて其傲慢之ゑ蔽ハれたりと云へり

『諸德の中孰れを貴しとし孰れを勝れりとするの難きハ猶ほ夫の百花爛熳芳香馥郁たる園に出て彼方此方の花ゑ目を奪はるゝに當り孰れの花を最も美とし孰れの花を最も香佳しとすること能ハざると一般なり然れども パウェル 及び基督の教ゑ依れバ諸の律法を包含するの愛を以て最も首要の誡となさゞる可らず而して予が考ふる所を以てせバ此愛の要点ハ吾人と同種類の人間たる貧者を愛し之を憐愍するゑ在り慈憐ほど神に悅バるゝの務あらじ蓋し神ハ自ら愛なれバなり』

(神學者グリイの言)

ワレント皇帝の位ゑある間即ち大約四十年間ハコンスタンティノポル

よゝ獨りアリイ黨のみ主教となれり而して此間主教並に有司ゝ大ゝ偽教を保護せしを以て諸種の異端ゝ公然世ゝ播傳して人民ゝ神學上の空論を事とし辨難攻擊街上ゝ爭論の聲絶えざ商工の輩ゝ至るまで基督の神性ゝ就きて爭論し或ゝ其神、父に對するの關係を議し或ゝ聖神の神性を確め或ゝ之を排斥せり

斯の如く偽教の公然流布するの間ニケヤの信經を奉する者ゝ常ゝ窘逐せられたりコンスタンティノポルの聖堂ゝ皆偽教徒の占領する所と爲り正教徒ゝ密會して祈禱し又時として山林の間ゝ集りて祈禱せしゝ此所にも敵ゝ屢々襲ひ來れり正教徒の窘逐を蒙り防禦を要せしと未だ曾て此時の如く切なることあらざ。ワレント帝崩じて正教徒ゝ稍、正教恢復の望を起しけれゞ皆神學者グリゴリイに目を注ぎ之を以て獨り正教徒を統合し紊亂錯綜せる教會を振興するの力ある者と爲し遂ゝ相謀りグリゴリイゝ書を送りてコンスタンティノポルゝ來り微微たる正教會の爲ゝ力を尽さん事を請へり

聖グリゴリイゝ父の勸めゝ從ひ其意を枉げて司祭の位ゝ叙せられたりしが后又其友ワシリイの勸に從ひ意を枉げて主教の位を受けたりグリゴリイゝ神品機密を以て頗る至重至大の者と爲し自ら吾人の司祭長たる大なる神の聖臺に奉事するゝ堪えざる者と思ひしに今其意を枉げて此職を受けたるを以て太く其柔和の精神を苦め重荷を負へるが如き思と爲せりグリゴリイゝ常ゝ世を墓なく思ひしが此時ほど憂鬱ゝ耽りたるおとあらざ彼れ其友に送れる書中ゝ述べて曰く『我ゝ我が刎頸の友なるワシリイを失へりダウィドと共ゝ我が父、我が母ゝ我を棄てたりと云ゝざるを得ず我が体ゝ虚弱ゝして朋友ゝ信義を守らざ教會ゝ牧師なく凡そ善なるものゝ皆亡びて惡ゝ公然露出す吾人

ん宛も暗夜よ航する者の如く燈臺ん何處にも見ゑず基督ん睡れり』

グリゴリイんコンスタンティノポルの教會より招待せられたるを以て神の旨の定むる所なりとし舊つて其任よ當り今や大よ其働きを顯んすべきの時至りしが僅に三年よして其任を去れり

グリゴリイんコンスタンティノポルよ正教を恢復するよ精神的の勢力と驚くべきの能辨とを以てせりグリゴリイの容貌ん之を招ぎし人民の豫期に適んざりき彼等んグリゴリイの名聲赫々たるを聞き威望凛々一見人を威服するよ足るの人なるべしと豫期せしに憔悴したる矮少蒲柳の人よして其日夜の心勞よて疲れ果て屢々熱涙よて濕はされたるの顏ん常に憂色を帶び其服ん粗にして主教の服と云んより寧ろ乞丐の服よ似たり然れども グリゴリイん暫時の間よ人々をして悉く是等の面白からぬ感情を去らしめ充分よ其豫期せし所を實行せり

否其實行せし所ん寧ろ其豫期せし所に超ゑたり グリゴリイん己の潔白なる靈魂を犧牲として教會の務よ献げ其の温厚謙遜の行爲ん恰も太陽の光線の如く彼が忍耐を以て其の耕作よ着手せる神の瘠たる畑を暖めたり

グリゴリイんコンスタンティノポルに着するや初め親戚の家に寓し間もなく其家の側に一聖堂を建て日々祈禱を行ひ説教を爲せり グリゴリイん此聖堂をアナスタシヤ聖堂即ち復活聖堂と名づけ正教を再興復活せんとするを豫期したり

來聽者ん初め甚だ少かりしが説教を爲すよ隨ひ聽衆日に益々增加して小聖堂ん忽ち狹隘を告くるに至れりコンスタンティノポルの民ん未だ曾てグリゴリイの説教の如く人を感動する有力の説教を聞きたることなし異教人たると異端者たると宗教に冷淡なるの人たるとを問

んず試みよ新説教者の説を聽かんと欲して來る者ん皆其能辨よ深く心を動かされたり

當時説教するよん説教者先づ『爾等に平安』と云ふの言を以て其冒頭に置き而して人民ん之よ答へて『爾の神よも』と云ふを例とせり。グリゴリイん此言を利用し『安和の精神』といへる事に就きて有名の説教を爲せり其中に曰く『神ん特に己を愛として顯ん し給ひ而して吾人ん其の愛なる者を戴きて神としつゝ互よ相嫉むん果して何事ぞ吾人ん安和を口に唱ひつゝ過激の鬪爭を爲すん抑〻何事ぞ』と。グリゴリイん異端者の迷謬を排擊するよと嚴にして假借する所なかりしも其人よ對する擧動ん頗る柔和よして人望次第よ之よ歸せり

グリゴリイんアナスタシヤ聖堂の教座よりして其の神學よ關する高尚の講談を爲す時にん最も劇烈なる反對者と雖ども全く其説に敬服し拍手喝采よ由りて屢々

其演説を中止せられ神學者の名稱ん永くグリゴリイの占有する所となれり然れども

グリゴリイん嫉惡の大嵐よ遭遇せざるを得ざりきアリイ黨ん常に之を罵詈嘲笑し之よ遇ふ毎に其の謙遜卑賤の容貌を嘲り屢々之よ石と抛ち危難よ遭遇して殆と命を失ん とせし事少なからず

グリゴリイん体力大に衰えければ一日説教の際自ら此事を述べて恐くんコンスタンティノポルを去らざるを得さるに至るべしと云ひしに之を聞く者皆慟哭し聽衆の一人聲を揚げて『爾若し自ら去らば是れ爾ん聖三者の教を我等の教會より除くものなり』と云ひけれバグリゴリイん此言に深く感動して教會を去らざるを約せり聖三者の事よ關する正教を恢復するん是れグリゴリイの宿望なり彼説教の際熱心の餘り聲を揚げて曰く『予ん使徒等と俱よ爾等を愛するの深き基督よ絶た

るゝをも甘んずと公言するを憚らぎ唯爾等吾人と共に立ちて偕に共に聖三者を讃揚せん事を希望するのみ』

然れども グリゴリイは遂に疲勞に堪えず郊外閑靜の地に避けて保養せり グリゴリイは大ワシリイと同く森羅萬象を愛する事頗る深かりき彼は信仰と祈禱に於て眞正の安和を得たるも其信仰と祈禱は森羅万象の美妙を觀察するに由りて益々熱せり グリゴリイは説教の間常に好んで日月の光、草木の鬱蒼たる有樣百花の馥郁たる狀、流水の潺々たる有樣、鳥の囀づる狀など無言の聲を以て神を讃美する世界の美觀を述べたり

グリゴリイは歸りて職を執りしが時恰も正教の大勝利を得るの好運に際會せり

此時幼年のフェオドシイは撰ばれて皇帝となり久しく分裂したる羅馬

大帝國此に再び一統せり。フェオドシイは賢明且つ剛毅にして實際に基督教の德義法の勢力の大なるを證せり フェオドシイは性急短慮にして且つ多情の人なりしが能く其怒氣を制し慾に溺れぎ過あれば悛むるを憚らぎ慈憐寛大なりき フェオドシイ帝の發布したる詔に由りて異教の命脈全く絶えたり フェオドシイはソルルンの正教を奉する主教より洗禮を領けニケヤの信經を認めて唯一眞誠の者と爲し之を斥くる者は皆異端者なりとし且つアリイ黨に命じ其の曾て正教徒より奪ひたる聖堂を正教徒に返さしめたり アリイ黨の主教はコンスタンティノポルを去り皇帝自らグリゴリイを導きて聖堂に入れしに正教徒は歡呼して『主教グリゴリイ』と呼べり然れども謙遜なるグリゴリイは斯の如く嚴かに遇せられたるを以て反て其心を苦しめたるは彼の自ら言ふ所に由りて明かなりグリゴリイは首を低れ怏々たる色を爲して歩み往

きしよ王命抗し難く其聖堂を讓りて憤懣を懷けるアリイ党ハ默々と
してグリゴリイを環視せり此日天氣朦朧として黑雲天と蔽ひしがグ
リゴリイ聖所よ入るや太陽の光線忽ち黑雲の間より輝けり人民ハ之
を見て善兆なりとし高聲歡呼して正教の新主教を迎へたり
グリゴリイが一個人として異端者に對する擧動ハ依然として頗る柔
和なりき說教の際よハ痛く之を譴責せしも皇帝よ嚴酷の手段を以て
アリイ党を窘逐する事を諫めたり此時アリイ教ハ皇帝の厚き保護を
得たるを以て其根底甚強く且つ又其派中に相容れざる種々の異說を
生じたり其中の重大なるものハ聖神排斥論者の一派なりとす。アリイ
黨ハ耶蘇基督の神たる性質を擯斥して之を聖三者の一と認めざるが
故に聖神の神たる性質をも擯斥するよ至るハ蓋し當然なりアリイ教
徒エウノミイなる者始めて此邪說を唱ひたりしがコンスタンティノポ

ルの主教マケドニイ之を保護するに及んで其說大よ勢力を得て四方
に傳ハり遂よ此異端よマケドニィの名を冠するに至れり三百八十年
の頃よハ此邪說に雷同せし主教三十六人よ下らざりき
是に於てニケヤ公會の后五十五年を過ぎて再び全地公會を設けて正
教の眞理を確定するの必要起りフェヲドシイ帝ハ三百八十一年コンス
タンティノポルよ全地公會を召集せり東方より會せし主教百五十人あ
りアンティオヒヤの主教メレティイ議長として公會を開きたりしが間も
なく死して公會議長の椅子ハグリゴリイの占むる所となれり
マケドニイの說を執るの主教等も召集よ應じて來りしも公會に列席
するを辭して自から避けたり時に公會の諸父ハアリイ教と連接して
起れる諸の異端を審査して之を罪定し而して后ニケヤ信經を以て萬
世不易の者と確定し正教を說明するが爲め之よ聖神及び教會洗禮復

活并に來世の生命等に關する左の條項を加へたり

聖神生を施すの主父より出で父及び子と偕に崇拜れ讃られ預言者を以て曾て言ひしを又信ず唯一の聖公使徒の教會を我認む唯一の洗禮以て罪の赦を得るを我望む死者の復活并に來世の常生を

此公會に又七個條の規定を以て異端者を再洗する事に關するの爭論を決定し且つ始めて常時羅馬帝國の地方制度の區劃に應じて教會治理の區域を定めたり都會に「パトリアルフ」を置けり即ち西方の爲に羅馬に東方の爲にコンスタンティノポルに亞弗利加の爲に亞レキサンドリヤに亞細亞の爲にアンティオヒヤに置けり而してイエルサリムに都會にあらざるも此府に神聖の關係あるを以て其主教に「パトリアルフ」と其位置を全等にせられたり羅馬に尤も古き都會なるを以て之を首座とし第二の羅馬たるコンスタンティノポルと以て其次に置けり「パトリアルフ」の管轄區域に大小都邑の主教等其の管轄部と共に之に屬せり此の教會政治の區劃に現時尚存すと雖ども樞要の都府に「パトリアルフ」の羈絆を受けざる政治を設け之を「エクザルフ」の管理に附す

聖グリゴリイに公會の閉會を告ぐると俟たずして去れり彼に爭論の紛々として已まざると主教等の異議を唱ふるの煩に堪えず且身体亦疲勞したるを以て閑靜の地に避けんことを乞へり此に於て公會に「パトリアルフ」子クタリィを選んで議長と爲し以て閉會を告ぐるに至れり

グリゴリイの人民に對する訣別の辭に切實にして大に人を感動し永く彼の能辯の有名なる紀念となれり此時グリゴリイの最も苦心せし所に己の業を繼續する適當の後任者を得るの一点にありき彼れ謂て

曰く『爾等宜しく清廉ゑして學識あり充分其職ゑ堪ふるの人を以て我が后任者となすべし』と。三百九十七年聖金口イヲアンが子クタリイに次ぎてコンスタンティノポルの教座に就くに及び此のグリゴリイの言い始めて行われたり

グリゴリイい此后父より讓り受けたる閑靜の別莊ナジアンズの近傍ゑあり)ゑ避けて六年の星霜を送れり此間屢〻教會の集會に來り與らんことを請われたるも多病虛弱なるを以て僅かに書を以て教會の事務に參與せり

グリゴリイい此間嚴肅修道的の生活を爲し其平生嗜める祈禱と業務とを以て老年の樂となせり

グリゴリイい婉麗の文を以て既往の經歷を叙するを好み幼時父の家ゑ於て幸福の生活を爲せし事

ワシリイに對する親密の友誼、曠野に於る時の勞働幷に俗世風波の間に遭遇せし憂悲心勞を述べたり、彼書して曰く『我い疾病の爲に疲勞し

今い唯詩を吟ずるを以て樂みと爲すこと恰も彼の老衰せる白鳥が其羽を動かし其音を聞くを以て自ら樂むが如し』と。

聖グリゴリイい三百八十七年ゑ世を逝れりグリゴリイい幼より恩寵を被れる者の一人ゑして其の潔白なる生活い幼少の時より悉く教會に對し並に凡そ神聖及び高尙なる者に對する愛の情を以て貫かれたり

第十六　金口聖イヲアン

イヲアンが母アンフーサの教育を受くる事。　イヲアンの隱遁及神品職を受くる事。　アンティオヒヤよ於ける説教。　コンスタンティノポルの教座よ招がる事。　奉神禮及唱歌を整ふる事及雄辨を振ふ事。　皇后エウドクシヤのイヲアンよ對する窘逐。　イヲアンの位を黜けらるゝ事其流竄及び赦免。　再度の窘逐并よ流罪よ處せられ苦を受け死する事

世界の燈、普世の師、教會の柱石たるイヲアンハ實よ基督教初世紀の説教者の偉大なる摸範たり彼の侃々諤々烈火の如き雄辨ハ淫乱諸惡よ沈淪せる當時の基督教社會を儆醒革新し社會德義の元氣を鼓舞振作して恢復の端を開けり惜哉世人の嫉惡イヲアンの身よ集り遂よ罪せられ流竄の苦を忍びて其光榮なる生活と終れり

イヲアンハ三百四十七年アンティオヒヤに生れたり其家富貴よして父ハイヲアンの幼少の時よ世を去り母アンフーサハ未だ二十歳に滿たざりきアンフーサハ世よも頼少き寡婦となりしより只管其子を鍾愛し其顏を見てハ亡夫の俤と爲しその容貌の美と年齡の若きを打忘れ日夜其子の養育よのみ思を注ぎて餘念なかりきアンフーサハ能く其子の教育に心を竭しければ其愛の賜ハイヲアンの身に取りて生涯慰藉と勢力を汲取するの泉となれり

當時ユリアン帝の命よ由りて基督教の學校ハ悉く閉鎖せられたるを以てイヲアンハ初め異教の學校よ入りて教育を受けたりしが其の才

智衆より秀で且つ學術の進歩の著しきとを以て仝學の友並び教師より至るまで皆驚かざるなしイヲアンの天性美妙を識得するの才あるより一旦異教の哲學より眩惑せられたるも其の陷る所と爲らず又學校を出づるより及び斯世の誘惑其耳目より觸れたるも亦能く之より陷らざりきイヲアンの多情多感活潑の人として敢て一事より滿足せず當時アンティオヒヤの遊興快樂を事とせる世俗の狀態の其の少年血氣の情を滿たすを得べきが如くなりしもイヲアンの充分の滿足を得ざ間もなく洗禮を受けんと欲するの念を起せり

イオアンのアンティオヒヤの主教メレティより洗禮を受けたりしがメレティのイヲアンを知るより及び深く之を愛して聖堂の誦經者と爲せり此職たる教會の最も賤き職より唯高座より立ち聖書を讀むの權利と得るに過ぎざりしも此事のイヲアンが畢生神の務より其身を献ぐるの端緒と爲れりイヲアンの領洗せし后自ら更生したるの思を爲し其の心を惑ませし所のものの悉く之を捨てたりされどもイヲアンの誦經者の職を以て滿足せず壯心勃々初より快樂を渴望したるもの今の功を立てん事を渴望し修道克己の生活を爲さんと欲するの心切よして曠野に隱遁せんとせしより先きに神の爲より之を教育せし母の之を思ひ止まらしめたり蓋しアンフーサの基督教を奉ずる者なるも彼の人の母として其生活の樂を全く棄つること能のざりしなりイヲアンの此事を述ぶるの狀一讀感に堪えず曰く我が母の我が決心を知るや無言にして我より近づき我が手を取りて已の室に携へ往き我を生みたる臥床の傍より對座し愁然として泣けり…而して后涙よりも更より悲き言を放ちて曰く

我が子より我の汝を見汝の顏より於て我が亡夫の俤を看るを以て此孤

棲の長き年月を送る間の唯一の慰となし汝が物言ふこと能わざる幼少の時より、小兒が尤も多く其親を慰むる時妾わ獨り汝を見るを以て慰となせり今一事汝に請ふおとあり汝わ妾を憐み再び妾をして孤棲の憂さを經歴せしめず再び妾をして既に泣き尽したる熱涙を流さしむること勿れ汝わ少しく待て、恐くわ妾の此世を去る遠からざらん然る后汝わ思ふ儘に行ふべし、今わ妾を憐み妾と共に居るを煩しとする勿れ妾わ未だ曾て汝を腦さゞりき今又妾を腦す勿れ汝恐くわ神の怒を招かん』と

嗚呼汝れ一言一句悲嘆哀願ならざるなし神の爲に妾さへ其愛情を絶ちかぬる母心の奥床かしさ此質實なる語に顯われたり

イヲアンわ母の懇請拒み難く其死するに至るまで之と共に居りしが母の世を去るに及びて其の屍に望める如く隱遁せり、アンティオヒヤ四周の鬱蒼たる小丘の上に修道院多くありしがイヲアンわ其中の一修道院に入りて四年の星霜を送れり。イヲアンわ修道の生活の旨意を確信せしが故に心に幸福を覺えたり只其有爲活潑の精神わ曠野の寂漠たる間にありて時に或わ悄然たることありしもイヲアンわ失望せず克己の嚴格なる行を以て有名なる老人の監督に己の身を委ねて其情を制したり此后山間の一洞窟に避けて二年の間純然たる隱遁の生活を爲せしが其の勞苦の嚴なるより健康を害してアンティオヒヤに歸らざるを得ざるに至れり斯くイヲアンわ前後六年間修道の生活を爲すの間に聖書の奥義に精通し無形物の實在を確信し且つ多くの星霜を無人の曠野に送りて世に出づる大聖人の固有する洞察力を得たりイヲアンのアンティオヒヤに歸りし后間もなく聖メリティわ之を立て補祭となせしが三百八十六年にメリティの后任者フラウアンわ之

を司祭の位ゑ昇せアンティオヒヤの人民ゑ説教するの職務を托せりイ
ヲアンが司祭の位に叙せられたる時初めて人民ゑ述べたるの説教い
謙遜の深きゑ由りて著るし曰く嗚呼是れ夜か將た夢か卑賤ゑして取
るゑ足らざるの一少年が斯る大任を受けたりといい誰か之を信ずる
のあるべき…請ふ汝等祈禱して上より大なる天佑の我に臨まんこと
を求めよ我ゑい今無數の祈禱必要なり庶幾くい我之に由りて今主ゑ
り受けし所の聘質を完うして返付するを得ん』と。イヲアンい神品の事
を論ぜる書ゑ於て司祭の行ふべき儀範を詳述せり曰く苟も教會を治
理し多くの人の靈魂を管理するを得べき人を要する時い才識萬人ゑ
卓越し彼のサウルが身の丈の高きを以てエウレイ民ゑ卓越せしが如
く若くい寧ろ之よりも更ゑ多く靈魂の完全なるを以て衆人ゑ卓越す
るの豪傑を要するなり』と。イヲアンい自ら全く其任に堪えざる者と思

へり而して此任を受けたる所以い彼の三たび主ゑ背きたることを記
憶して恐懼戰慄つゝ主ゑ爾い知らざる所なし爾い我の爾を愛するを
知る（約翰廿一）と云ひて其愛を表せし門徒と受けたるの主ゑ深く望を
属せしが故なり

イヲアン曰く大なる使徒が始めて基督の羊群を牧すべき命令と其の
前に述べられたるの問を聞きし時より基督ゑ於けるの愛い牧師職ゑ
欠くべからざる要件と爲り而して牧師職其者い此愛の無上の表現と
なれり』と。イヲアンい實に此愛を以て其心ゑ充て此愛の力に由りて毅
然忍耐を以て能く信者の群を牧せり十二年の間イヲアンの説教いア
ンティオヒヤゑ赫き渡り使徒の時代以來此の如く人を悔改ゑ導き神ゑ
向いしむるの有力なる説教を爲せし者なし。アンティオヒヤにい基督教
徒のみ十万人ありしが此外エウレイ人幷ゑ異教徒に至るまで群を爲

し來りてイヲアンの無情冷淡の人をして奮起せしむる説教を聞けり

イヲアンハ舊約の大預言者の如く言を以て人の心を熟し其説教を聞く者は聲を揚げて慟哭せざる無かりき

イヲアンの説教せし使徒の聖堂はアンティオヒヤ人の輻輳する中心となれり人民は感服の餘りイヲアンを稱して能辨者と名づけ或は蜂密の如き者と名づけ或は神の口と稱せしが一日説教を聽聞せる一婦人は其説教の妙なるに感じ聲を揚げて我等の靈魂の師金口イヲアンよ爾の教へは奥妙なして吾人の淺薄なる智慧を以て悉く了解する能はず』と叫びければ此時より人皆之を金口と名づけ教會は永く此名稱を彼に付せり

アンティオヒヤの大騒乱の際に於けるイヲアンの働きは殊に著るし。當時皇帝は軍資を募るに際し民に新税を課しければ人民憤激して爭乱

を釀せしに煽動教唆せられたる賤民は激昂して皇帝の像を倒し市中に之を引廻し嘲笑罵詈しつゝ之を粉碎せり夜に至りて人民の騒乱漸く鎮静せしが人民は其暴行を爲せしを悔ひ如何なる罰の其身に及べんとするかと豫想して恐怖爲す所を知らず。注進者ハ已に皇帝に奏上せんとてアンティオヒヤを出立せり。…時にイヲアンは默せり

蓋し此騒擾の初にハイヲアン憂虞の餘り自由に意中を吐露する能ハざ且つアンティオヒヤ人も懊脳としてイヲアンの説教に耳を傾くるの遑なかりしなり。數日を經て人心の鎮静するに及びイヲアンハ説教するの必要を悟り遂に民に向て悔改すべきを諭し且つ之を慰むるの説教を爲せり

曰く我何をか述べ何をか言はんや今は流涕の時にして説教の時にあらず慟哭の時にして演説の時に非ず祈禱すべき時にして説教すべき

時よあらず…此犯罪や實よ重く此病や甚だ危篤にして治療を施すに由なく唯天の佑けを要するのみ』此に於てイヲアンは更に愛憐せる人民を勵まさんとし言を轉ドて曰くされど愛すべき人民よ爾等の靈魂を我に托せよ吾人は從來の習慣を恢復せん吾人は常よ善意を懷きて此處に來るを例とせり今又万事を神よ委ねん吾人は決して失望すべからず吾人自ら己の救贖を慮るのみならず吾人よ靈魂を賜ひし者の之を慮るや深し吾人は宜しく望を起し愛を以て神の吾人よ行はんと欲し給ふ所のことを待たんのみ』

時よ皇帝の逆鱗甚しくアンティオヒヤ府を毀ち府民を屠らんとするの風評傳はり民は驚愕して薄氷を蹈むの思を爲しけれバ老年の主教フラウアンは自らコンスタンティノポルに赴き深く其罪を犯せしを悔ゆるアンティオヒヤ人よ大赦の恩命を垂れ賜はんことを親く皇帝よ歎願せんとて出立せり

尙數十日を經ざれバ皇帝の裁決如何を確知するに由なし此間人民は恐懼甚しく皆殆と生きたる心地なしイヲアンは此機會よ乘じて人民を唯一安穩の港たる敎會よ誘導せんとせり時に偶ま大齋期と爲りけれバイヲアンは日々說敎せりアンティオヒヤ人は此時の如く靜肅に大齋を守りたることなし鬪獸場劇場等は悉く閉鎖し街上よは歌舞音樂の聲聞ゑず市中の商店は皆休業して人皆祈禱の心情を懷き全市恰も一大聖堂よ化せしが如くなりき。時にイヲアン謂て曰く汝等及び汝等の良心は吾人が此の現時の誘よりして己よ幾何の利益を得たるやを實驗せり未だ曾て敎會を見ざる者は此よ來り街衢よは闃として人聲なく聖堂にハ人充滿して人々彼處は悲を起し此處は喜悅を予ふるを悟れり』

時にフラウアン皇帝よ謁見し敢て人民の爲よ辨解せゞ唯基督の例よ效ひて大罪を犯せる人民を赦免し以て敵を宥すの勢力を與ふる基督教の榮と輝かさん事を歎願しけるにフェヲドシイ皇帝は之を赦免せり皇帝はフラウアンよ謂て曰く汝往ぎて慰藉せよ舵手を見るときは既に過ぎ去りたる暴風の懼を忘る』と。フラウアンが大赦の恩命を携へて歸りし時は恰も「パスハ」祭日なりければ全市の民擧て聖堂よ集り悔改と愛と感謝の情を以て喜ぶよと限りなかりき。イヲアン曰く吾人は此の喜びの日に吾が全身を以て悅びつゝ啻に災厄の止みたるが爲め神よ感謝するのみならず彼が吾人よ賜ひたる事の爲め常よ主に感謝すべし』

此の著名の事件は大に基督教の榮を輝かせり民の危急存亡に際せる時之を慰め之を勵まし之を保つ者はイヲアンを措て他よ之れ無かりき。又皇帝の前に恐るべき犯罪の赦されんことを哀願する者は基督教會の外よ能く之を爲す者なかりき且つ當時羅馬國の皇帝の之を赦免したるも其の基督教徒たるが故なるのみ。故よ異教人は此事件よ由りて深く感ずる所あり教會よ歸依する者頗る多かりき。此后尙數年の間聖金口はアンティオヒヤに在りて教會の爲よ力を盡し日よ益々人民の愛する所となれり聖金口の說教の筆記せしもの多く后世よ傳へられしが其大半は彼がアンティオヒヤに在りて說教せし所の者なり。聖イシドル曰く『此傑作を知らざるは猶ほ白晝太陽を見ざるがごとし』と。聖金口の說教は長く后世說教者の摸範と爲すよ足る。其說教の此の如く効力大なりしは其の熱切の信仰と基督よ於けるの熱愛及び人民を憐むの心より出てたるが故なり聖金口は彼の基督の門徒が始めて基督教徒と稱し（行傳十一の二十六）后ち都會の驕奢著しく增長して基督教の良習慣の衰

へたるアンティオヒヤ人よ説教して只言と儀式の上に信仰を表するのみならず行爲の上よ之を實行すべきを勸め以て之を基督教の初代の精神よ恢復せり聖金口は殊よ愛と慈憐の必要を宣べ其の萬事に於て摸範と爲せし使徒パウエルに倣ひ倦まざして衆人に善を行ひ衆人を神に導き以て基督の爲よ衆人を得んと務めたり

聖金口はアンティオヒヤ教會を愛する甚深かりしも俄よ之と相離れざるを得ざるよ至れり神は之をして更よ困難なるの鬪爭よ當らしめんとし給へり

イヲアンの名聲羅馬國内に轟きけれバコンスタンティノポルの大主教チクタリイ死するに及び大フェオドシイ皇帝の子なる皇帝アルカディイはイヲアンを擧げて其任を襲はしめんとせしに人民亦之と一致してイヲアンを招ぎ羅馬首府の教座を占めしめんとせり皇帝はアンティオヒヤ人の之を拒まんことを恐れ窃よイヲアンをアンティオヒヤより召し出せり

イヲアンコンスタンティノポルよ到るや人民は頗る之を歡迎せしが其選擧を非とせし者は不滿を懷きたりアレキサンドリヤの「パトリアルフ」「フェヲフィル」の如き不平尤も甚しく勅命拒むよ由なくイヲアンを「パトリアルフ」と認めたるも此時より其嫉惡毫も衰へず聖金口は之が爲め多くの災難と憂愁よ遭遇せり

イヲアンは三百九十三年の二月二十六日「パトリアルフ」の位よ即き其の時よりして已の任の前途甚困難なるを悟りたれども聖神の恩寵に て其精神を堅められつゝ其大任を受けたり此時や教會の狀態甚だ慨然よして到る處荒蕪せしが如き狀を呈し風俗の紊乱亦甚しかりき聖金口は初めコンスタンティノポルの人民よ不快の感覺を起さしめた

り彼は神學者グリゴリイと同く一見人をして威服せしむるが如き凛乎たる風采なく容貌憔悴して唯炯々たる眼光は蒼顔に一種の光彩を添えたりイヲアンは貧困者に接する懇篤なるも貴人若くは徒に來訪する者に對しては傲慢苛酷に見えたり鷄鳴より深更に至るまで絶えず勞を取れる嚴格なる生活は華美を競へる都會人士の意に適せざりき此に於て四方よりイヲアンを訴ふる者起りたれどもイヲアン自から已の正義なるを以て敢て辨解せず己の身に對するの攻擊は一も辨駁せざりき。されど神の事に關しては何人にも一歩を讓らず其譴責の言い雷の如く轟きたり何物たりとも彼の憤れる譴責を止むる能いず何物たりとも彼より隱るゝ能わず能いざりき都會の人い未だ曾て此の如き嚴格の説教を聞きしことなきを以て之が譴責の衝に當る人々即ち驕奢淫逸に耽るの富者、其職分を放任するの有司、貪利不

正の裁判官の如き皆忍ぶ可らざるの思を爲せり

然るにイヲアンは益々孜々として教會の爲に力を盡し日に倍々其光輝を放てり村落には聖堂を新築し人民に祈禱する事を勸めつゝ大に奉神禮を莊麗にするを慮り特に其意を唱歌に注ぎたり彼謂て曰く『人心を奮起し之を高尚にして其心を地より離れしめ之を聖なる愛に向はしむるものは音律の能く整ひたる詩と聖歌とに如くは莫し吾人の天性は詩歌に由りて樂を得ることと實に大にして彼の哺乳兒の如き泣くとき之を聞けば忽ち眠むるに至る乳母は小兒を懷き彼方此方を逍遙しつゝ子守歌を歌ひて之を慰めて其泣を止む凡そ勞働は歌にて慰を得ること多くして靈魂の如き聖歌の聲を聞く時は煩悶憂愁を忍ぶこと殊に易し靈歌は人心を聖にするの泉にして其言は靈魂を清め聖神は之を歌ふ者に降り能く意味を了解しつゝ聖歌を歌ふ者に實際

神の恩寵臨むなり』と。イヲアンの教會を愛する情ハ其説教に反映せり彼は自から人ヨ儀範を示しつゝ已の聽衆ヨ之ヨ傚ふを勸めたり彼曰く『有効の教訓は儀範より出るなり、人聖堂より出づるヨ當りて自から言はざるも其の顔ヨ顯はれたる安穩の狀と其眼光、其音聲は聖堂ヨ來らざりし者ヨ彼が如何なる喜悅を感せしか彼が己の靈の爲ヨ如何なる幸福を受けしかを示すなり何者か此の如き勸諭に勝さるものあらんや吾人は聖堂より出づるに當り仍ほ彼の神品ヨ叙せられたる者が聖所より出づるが如く吾人を見る者をして皆明かに吾人が此處より何如なる幸福を携へ出るかを知らしめざる可らす』

イヲアンは奉神禮の規律を整理し此時に至るまで採用せられたる大ワシリイの聖体禮儀式を省略して一の聖体禮儀式を作り又徹夜奉事之式を制定し和唱歌を唱ひつゝ十字行列と爲すの式を定めたりイヲ

アンハ言を以て儀範を以て其任を尽しつゝ神品輩ヨ鋭意其職を行ふを勸めけれバ教會ハ頗る振興し人民は群を爲して聖堂に集れり且つイヲアンはアリイ教徒をして正教ヨ歸化せしめんとせしが當時アリイ教はゴット人の間ヨ最も盛なりけれバ彼等の爲め其種族中より司祭を立て之に聖堂を予へ其方言を以て奉事を行はしめ自から屢々聖堂ヨ至りて説教し通辨をして其説教を口譯せしめたり。イヲアンは又福音を遠方の諸國に傳ふる事を熱心ヨ慮りスキフ人ゴット人スラウヤン人ヨ傳教者を遣せり此の如くなるを以てイヲアンが初めアンティオヒヤに於て人望を得たる如くコンスタンティノポルヨ於ても亦大に人望を博するに至れり且イヲアンも亦其愛の力を以て正道ヨ向はしめたるの信者を愛すること甚だ切なりき彼謂て曰く『爾等は吾父吾兄弟吾子吾肢吾身吾生命吾榮冠吾慰藉吾光なり』

聖金口の末年卑劣壓制跋扈して聖人の德の侮辱せられたるは誠に痛嘆ゝ堪ねざる所なり皇后エウドクシヤ、宦官エウトロピイ及びアレキサンドリヤのフェヲフィルはこれ義人を苦しめ之を亡ぼせし不敬虔者の名なり宦官エウトロピイはアルカディの寵を得たる者なりしが初めイヲアンを皇帝に推擧し以爲く我彼を推擧せバ彼必ず我が恩に感ト我を保庇すべしと。然るに其豫期ゝ反してイヲアンは之が嚴格なる譴責者となれりアレキサンドリヤの主教フェヲフィルは初めイヲアンを擧げて「パトリアルフ」と爲すを拒みたりしが其位置を得たるを見て快々として樂まず其心ゝ藏せし嫉惡の念を漏すの機會至るを竢てり又皇后エウドクシヤはエウトロピイが柔弱なるアルカディを籠絡し權勢を張るを見て喜バざ夙ゝ之を除かんと欲せしを以て新任の「パトリアルフ」を引て己の党と爲さんとし萬事ゝ於て其意を迎ひ之が補助を求

めん事を務め多く教會に寄附し貧者を惠み敬虔なる行を爲して「パトリアルフ」の愛顧を得んと務めたり三百九十八年ゝ城外の聖堂ゝ聖不朽体の遷移式を行ひし時皇后エウドクシヤは徒跣ゝて首を覆はざ恭しく十字行列ゝ加はりけれバイヲアンは之を見て頗る感動し雄辨の説教を以て此行列ゝ皇后の加はりたるを稱讃し彼主の婢として其謙遜潔淨なること猶彼の神使の一の如し』と云へり。然るに皇后エウドクシヤは謀を以てエウトロピイを除け自ら國家の大權を掌握するゝ及びて其のイヲアンに對する關係は一變せり。時にイヲアンの敵は早くも皇后ゝ諛ひ「パトリアルフ」は説教に於て暗ゝ皇后を譏るが如き事を述べたりと告げたり皇后い良心ゝ省みイヲアンの譴責せる罪なきにあらざれバ此一言既ゝ其慢心を激し復讎の念を起すに足れりエウドクシヤ果して之を皇帝ゝ訴へたりイヲアンい過激の説教をなせり

とて譴責を蒙りければ答へて曰く『我ゝ主教よして我よ多くの人の靈魂を慮るあとを托せられたり皇后にして若し自ら省みて疚しからず怒り給ふの理なからん我ゝ只惡を責めたるのみよして何人をも指名せず唯衆人よ惡を爲さゞらんことを敎ふるのみ』と。エウドクシヤゝ主敎の毅然たるを見て益々怒を激し遂よ其敵を近づけアレキサンドリヤのフェヲフィルと謀りて公會を招集し聖金口に對するの告訴を審議せんと決定せりイヲアンの敵の中より招集されたる四十五人の主敎を以て組織せられたる公會ゝドゥブノ村よ開かれたり聖金口よ對する告訴ゝ二十九箇條にして皆無根の讒誣よ外ならざりき其中イヲアンが公衆の前に於て皇后をイエザウェリよ比し之に侮辱を加へたりとの告訴ありたり此不法の公會ゝイヲアンの位を黜くる事を宣告し之を放逐の刑よ處して皇帝の批准を經たり

此報一たび傳ゝるや人民頗る動搖しコンスタンティノポルの四方より聖ソヒヤ大聖堂幷よ歩廊を以て之と連接したる大主敎の邸内よ集り日夜鐵壁の如く之を圍みたり道路よゝ種々の風説傳ゝりイヲアンゝ放逐せらるゝのみならず死刑の宣告を受たりとの説を傳ふる者あり人民ゝ此等の風説を耳よし憤懣動搖して聖堂よ集りイヲアンの爲よ祈禱し或ゝ堂前の街巷よ群集して遙に大主敎の顏を見若くゝ其聲の響を聞かんとせり

人々の混亂せる間にイヲアンゝ獨り悠然たりき。彼信者よ諭して曰く『何人たりとも何物たりとも決して吾人を隔離する能ゝず吾人ゝ塲所を以て相隔つるも愛にて依然合同一致するものなり死と雖も吾人を隔離する能ゝず縱令吾が肉体ゝ死するも靈魂ゝ生活して此民を忘るること勿るべし汝等目前の事件を見て驚く勿れ唯確固不拔の信仰と

顯ハして我に汝等の愛を示せよ我ハ主の聘質を有し已の力を恃みとせぞ我ハ彼の聖書を有す此聖書ハ我が支柱、我が城郭、我が安穩なる湊よて其言ハ我が爲に楯なり牆壁なり其言とハ何ぞ我汝等と偕ゑ世の末ゑ至らんとすと云ふ是なり基督我と偕にす我誰をか恐れんや万事神の好み給ふ所の如く成るべし彼若し我をして此に居らしめ給ハゞ我彼ゑ感謝せん又我をして此處を去らしめ給ハゞ我亦彼ゑ感謝せん』

翌日晝頃侍從の一人イヲアンの許ゑ來りて速ゑコンスタンティノポルを去るべき王命を傳へけれバイヲアン謂て曰く『我ハ謹で王命を奉せん一滴たりとも人をして我が爲ゑ血を流さしむるを望まぞ』と斯くてイヲアンハ既ゑ備へられたるの舟ゑ乘移りけれバ舟子ハ夜の暗きに乘じて漕出たり

然るに翌朝人心益々恟々として人皆聖堂に集り或ハ街巷ゑ群集し其

の愛する牧師の爲ゑ熱心祈禱して其敵の所爲を憤れり

此夜大地震俄に起り皇居の近傍及び皇居内ハ震動殊ゑ烈しかりけれハ皇后エウドクシヤハ驚き涙を垂れて夜半皇帝ゑ見之『我等ハ義人を放逐せり故ゑ主ハ吾等を罰するなり速かに彼を召還せざる可からず然らざれバ吾等皆亡びん』と云ひ自からイヲアンゑ書を送りイヲアンを罪せし事に與からざるを証し速に歸らんことを請ひ使者を出すと再三切ゑイヲアンの歸るを俟てり時ゑ人民ハ此事を知りけれバコンスタンティノポルの港は忽ち舟ゑて蔽はれたり人々イヲアンを迎へんとし爭ふて埠頭に出て之を待受け夜ゑ入りて舟に火把を點し岸上ゑ篝火を焚き人民の歡呼する間に大主教ハ歸れりイヲアンハ更ゑ公會ゑ於て己の位を黜けたる命令を廢せざる間ハ市ゑ入ることを辭せしに人民の動搖甚だしく皇后ハ速に市ゑ入らんことを懇願しけれバ

イヲアンは民心を鎮靜せんとて命を奉ト左右前后人民ゑ擁されつゝ嚴かなる詠歌の調に連れて市ゑ入れり、イヲアン聖堂に入るや先づ人民に降福し高聲に神を頌讃して曰く『我をして去らしめ給へる神ゝ讃揚せらるべし我をして歸らしめ給へる神ゝ讃揚せらるべし暴風の起るを許し給へる神ゝ讃揚せらるべし又之を鎮靜し給へる神ゝ讃揚せらるべし』と

此ゑ於て更ゑ六十五人の主教を召集して新ゑ公會を開きドゥブノ公會の不正なるを議決しイヲアンを其位ゑ復せり斯の如くイヲアンの身ゑ光輝を放つと間もなく再び黑雲其身邊ゑ集れり此後未だ二ケ月を經ざるゑ皇后の妄信的の恐懼心忽ち失せ其權勢の隆なるより慢心を萠し城中ゑ己の像を立てんと欲せり斯くて肖像ゝ聖ソヒヤ聖堂ゑ相對する街區ゑ建てられたりしが之が被覆式を行ふに當り全く異教風

の騷しき祝ひを爲し人民の喧擾と放歌音樂の聲ゝ聖堂ゑ達し讀經及び唱歌ゝ之ゑ壓せられて聞えざりし時にイヲアンゝ聖堂ゑ於て之を痛責するの說教を爲しけるゑ其說教の中ゑ『イロディアダゝ復た舞ひイロディアダゝ復た動搖して復たイヲアンの首を求めんとす』と云へりと皇后ゑ訴ふる者ありけれバ皇后の「パトリアルフ」ゑ對する嫉惡ゝ益々烈きを加へたり時ゑ偶々「パスハ」祭近づけり當時凡そ基督教國ゑ於てゝコンスタンティノボルの聖ソヒヤ聖堂に於けるほど嚴に此大祭を執行せし所なし皇帝ゝイヲアンの復職を不法と見做すの意を示さんと欲し之より聖体機密を領くるを辞し且つイヲアンに聖堂ゑ臨むべからざるの命を傳へしめたり然るに大土曜日ゑゝ聖ソヒヤの聖堂に於て新ゑ教に歸せし三千人餘の人々に洗禮を授くるの約ありけれバイヲアンゝ早朝聖堂ゑ至りて祈禱を行ひ洗禮機密を施行するに當り

兵器を手ゐしたるの兵士俄に吶喊して聖堂ゐ入りイヲアンを捕へて聖堂より出だせり人民ハ之を防ぎて傷を負ひ且つ殺さるゝ者多く兵士ハ洗禮を受くるに準備せし者を逐ひ驚愕の聲劒の音婦女の涕泣負傷者及び死する者の呻吟聲堂ゐ充てり

兵士ハイヲアンを曳きて其家ゐ幽閉せり洗禮を受くる者ハ城外の領洗場ゐ至り又ハ混湯ゐ入り神品ハ水を聖ゐして洗禮機密の式を行ハんとせしゐ兵士ハ又之を妨げたり

夜ゐ入りてコンスタンティノポル城ハ闃として聲なかりき正教徒ハ其敵の支配する聖堂に入るを好まず城外の平原ゐ集り戯かゐ「パスハ」祭の奉事を行へりイヲアンハ大主教の邸内に幽閉せられしが五旬節頃ゐ至りて放逐の宣告を受けたりければ一たび聖ソヒヤの聖堂ゐ至りて神品幷に友人に訣別せん事を乞へり時ゐ人民ハ聖イヲアンの聖堂

ゐ在るを知り堂前の街區ゐ集りイヲアンの表門より出るを待ち居りけるゐイヲアンハ神品幷に堂役者に別を告げ之ゐ教訓を垂れ降福し終りて窃かに裏門より出て已を迎ふるゐ來れる者と共に埠頭に赴けり

人々ハ待つこと久しく遂ゐ疑を起し海岸ゐ至りて見れば已ゐ舟の漕ぎ出つるを見たり之を知らざる者ハ聖堂と襲ふて入らんとせしゐ兵士ハ之を退けゝれば再び非常の混雜を生じ人民ハ戸を蹴破りて堂内ゐ闘入しけるゐ兵士ハ白刃を揮ふて之と戰ひ負傷者及死する者の呻吟聲再び堂に充てり時ゐ暴風俄に起り又夜半聖ソヒヤ堂に火起りて聖堂元老院を始め大厦高樓を燒盡し火勢殆ど皇城に及ばんとせり

イヲアンの敵ハ厚顔もイヲアンを以て此火災の教唆者なりとせり時ゐ多病獨身のイヲアンハ放逐の場所を指して旅行せしが到る處人皆

之を歡迎せしも其旅行い非常ゑ困難ゑして途ゑて屢々瘧疾を患ひ疲勞甚しく七十日を經て漸くアルメニヤ山のククズ村ゑ到着せり此僻邑に於てイヲアンい基督教徒ゑ大ゑ厚遇優待せられ其の鬱屈したる心の蘇生したる思を爲せり主教アデルフィイを始め信者い及ぶ限り大受難者を慰めたり

金口イヲアンい此の如く憂愁困苦の中ゑ在ること三年その間筆を採りて教會の爲ゑ勞せりイヲアンい神の己ゑ近きと基督教社會の己ゑ同感と表するとを知りて其心を慰め氣力を保ちククズゑ在りても仍ほコンスタンティノポルに於ける時の如く普世の燈と爲れりイヲアンい東西の多くの主教幷に四方の修道士の社會と書翰の往復を爲し來り訪ふ者あれば喜んで之に教訓を垂れたりしがアンティオヒヤ及びコンスタンティノポルより來る者少なからざりき此の如くイヲアンの勢

力益々加いるを以て其敵い恐懼を懷き遂ゑ四百七年の六月兵を遣いし金口イヲアンを黑海の海濱にあるピンティオントと云へる村に送るべきを命せり（ピンティオントい當時羅馬帝國の東境の極端にして現今ピツンダと云へる邑のある所なり）

兵卒い旅中大主教に充分侮辱を加へ之を虐遇し苦ゑ堪ゑずして死ゑ至らしむべしとの內命を受け頗る殘忍ゑ其命令を實行しければ三ケ月旅行せし后コマンといへる邑の邊に至りし時ゑいイヲアンの疲勞甚だしく休息せざるを得ざるに至れり聖金口い致命者ワシリスクの墓の傍ゑ憩ひしゑ此の致命せる主教い夢に於て聖金口に顯れ苦難を脫すること近きゑ在るを告げて之を慰めたり翌朝兵卒いイヲアンの憐むべき狀態なるをも顧みず强て之を曳往きけるゑイヲアンの容態愈常ならざりければ直に之を致命者の墓に携へ歸れりイヲアンい

兵卒に請ふて白き洗禮服を着け領聖し了りて『萬事の爲め榮を神に歸すアミン』と云へる著名の辭を口ゐして此世と去れり

聖金口の死せし后三十年を過ぎて「パトリアルフ」プロクルハ當時の皇帝小フェヲドシイハ說きて聖金口の不朽体をコンスタンティノポルに移さしめたり是の遷移式ハ頗る嚴かなりき皇帝ハルキドンハ出て之を迎ひ俯伏して聖金口ハ其兩親アルカデイ及びエウドクシヤの罪を赦さん事を祈りコンスタンティノポルの港ハ一面に篝火を焚ける小舟ハて蔽ハれ人民ハ恭しく歡呼して大牧師の遺骸を迎へ奉り

第十七　第三第四第五第六全地公會

異端者子ストリイに對するエフェスの第三全地公會

アレキサンドリヤの聖キリール。エウティヒイの異端。エフェスに於ける乱暴の集會。ハルキドンの第四全地公會。ユスティニアン皇帝の時の第五全地公會。クリトの聖アンドレイ

當時基督敎は東西ゐ蔓延して勢力と得たり東方ゐ於ては聖なる傳道者及び修道士の盡力ゐ由りて神の道は遠隔の地ゐ傳播し廣漠たるの荒野にも傳はれり聖金口イヲアンは殊に熱心ゐ各國の語ゐ聖書を翻譯し野蠻人を敎化する事を慮れり東敎會ゐては常に遠隔の地ゐ傳道

者を派遣し又聖修道士等は毫も危難を意とせゞ野蠻民の間ゝ住し傳道と敬虔の行とを以て彼等を基督教に歸せしめ聖隱遁者等は曠野の菴室ゝ於て聖書を研究解釋するに從事せり東方ゝは教理の發達殊に著しかりしを以て西より敬虔の人々多く東ゝ來り數百年間西方教會の生活上ゝ至大の影響を及ぼせり

當時智識上の作用は悉く教會ゝ集れり異教は全く支離滅裂ゝ歸し僅ゝ遺存したる異教の學者哲學士輩は到底教會と相爭ふの力なく第四世紀の頃ゝは高尚博識雄辨の偉人教會より出でたり即ち東方ゝ於ては大ワシリイ、其弟ニッサのグリゴリイ、神學者グリゴリイ、金口イヲアン、アレキサンドリヤの聖キリール、キプルのエピファニイの如き是也、

然るゝ此の如く人々の研究せる教理及び教會ゝ關する問題は亦爭論紛議の因となり既に衰へたる異端の代りに新異端起りて其勢力大ゝ

張れり曾て教會の擯斥する所となれるアリイ教は以前の形を以て世ゝ顯はれざりしと雖ども其種子尚遺存し迷謬は形を變へて顯はれたり耶蘇基督は神の誠の子ゝ非ずと論定する者はなかりしと雖ども大膽にも神人の性質を推究せんとし甲は基督を以て單ゝ人体の幻象を帶ぶるの神なりとし乙は人性のみありて神性ハ只之を蔽ひたるゝ過ぎずと主張し丙ハ其神性と人性とを區別し截然之を分ちて恰も二つの如き者となし其結果遂に至聖童貞女ハ產ゝ由りて只神人の人性ゝ關係ありとし之を神の母と認め且つ稱することを拒みたり

始て此後說を首唱せし者ハ子ストリイなり子ストリイハ初めアンティオヒヤの司祭なりしが皇帝小フェオドシイの寵愛を獲其推擧に由りてコンスタンティノポルの「パトリアルファ」に立てられたり子ストリイハ品行嚴正博識雄辨を以て名あり初め異端の撲滅ゝ熱心盡力し一日說教

の時皇帝ゝ向ひ『陛下願くゝ此國より異端者を掃蕩せよ然らゞ臣ゝ陛下ゝ天國を予へん』と云へり チストリイゝアリイ黨幷ゝ其他の僞教徒を窘逐する甚た嚴ゝして教會の規律ゝ違背する事ゝ些細の事と雖もチストリイゝ之を譴責して假借する所なかりしが遂ゝ自ら恐るべき異端者の首魁となれり

チストリイゝ初め己の説を隱蔽し先づ一司祭アナスタシイをして之を發表せしめたり一日アナスタシイゝ聖堂ゝ於て主教の面前にて神の子の藉身の事に就き説教するゝ當り至聖童女を生神女と稱ふるゝ不當なり何となれゞ造物者ゝ己の造物よりして生るゝこと能ゝざれゞなりと斷言せり之を聞く者相惑ふてチストリイゝ質問せしにチストリイも之と同感の旨を述べたり

此説ゝ已に初世紀の教會にて擯斥せられたるの異端なるを以て普く

人々の憤懣を來し司祭プロクルの如き力を極めてチストリイの説の正理に背くを譴責せしゝチストリイゝ其意を翻さゞるのみならず人民の已ゝ反抗するを見て大ゝ激し己の權利を濫用して凡そ己の説を反駁する者ゝ悉く之を窘逐せり加ふるゝチストリイゝ皇帝幷に皇室の保護を得たり當時國家の大權ゝ凡庸の人々の握る所となれりフェオドシイ大帝の死后其國ゝアルカディイ及ゴノリイの二子之を分轄せしがアルカディイ死するゝ及び柔弱なる小フェオドシイゝ帝位ゝ即けりチストリイは幼帝の寵愛を利用し啻ゝ公然コンスタンティノポルに其説を傳播せしのみならず更に諸教會幷ゝ修道院ゝ已の説教の筆記せしものを送りて四方ゝ之を擴張せり

此筆記は埃及に達しけるに修道士輩之を聞て頗る動搖しけれバアレキサントリヤの「パトリアルフ」キリールは已の教會幷ゝ全基督正教會

の保護者となりて此僞教を排撃せりキリールは諸教會より書を送り且
チストリイと書翰を往復して其説を駁し羅馬の「パパ」ツェレスティンもキ
リールと共に之を駁撃しければチストリイは諸教會の動揺を來たせ
る故を以て自ら公會を召集せん事を請求し敬虔なる皇姉プルヘリヤ
も亦皇帝に説きて之に同意せしめたり是に於て四百三十一年の六月
七日にエフェス府の至聖生神女の聖堂に於て第三全地公會は開設せら
れたり
此公會に於てチストリイの僞教は罪定せられ二百人以上の主教は其
決議に同意を表しチストリイの位を黜け其の主教職を褫けり
神の子の精身に關する教會の定理は左の如くに言顯わされたり
吾等は承認す吾主耶蘇基督は神の子、完全なる神及び智識ある靈魂
と肉体とを具ふるの完全なる人なりと又彼は世の先より神性に由

りて父より生れ后世彼自ら我等の爲め幷に我等の救贖の爲に人性
に由りて童女マリヤより生れ此に両性の合一成れりと是に因りて
吾等は唯一の基督唯一の主を認む
聖キリールはアレキサンドリヤに歸り正教に熱心にして埃及より異
教を絶滅するに力を尽し其の死する時(四百四十四年)に至るまで教會
を治理せりキリールの神學上の著作は教會の爲に至大の價値を有す
其書の主眼とする所は神の子精身の定理を明かにし此定理に關する
の邪説を排撃するに在りキリールは聖書に悉く註解を下せり又生神
童貞女や喜べよ云々の祝文及び大金曜日の時課の順序もキリールの
制定せし者なりと云ふチストリイは數年の間アンティオヒヤ近傍の修
道院に居り后ち埃及の曠野に流竄にせられたりしが其異端は亞細亞
地方就中波斯及びアルメニヤ等に勢力を得たり

此后幾何もなく再びコンスタンティノポルは騒乱起れり眞に教會の幸福及び安和を望むの敬虔なる主教等は基督教徒の愛の爲に頗る不利なる神學上の爭論の起るを恐れたり神學上の爭論は人をして互に敵視せしめ且つ往々名利の慾を遂ぐるの口實と爲り怨恨を露すの器械と爲るは彼等能く之を知れり然るにキリールの后任者ディオスコルは此の如き敬虔の人にあらず名譽心深く且つ傲慢の人にして一已の利益上よりエウティケイの新異端を保護せり

エウティケイはコンスタンティノポルの一修道院の掌院(アルヒマンドリト)として初め熱心チストリイに反對せしが(チストリイの説を駁しつゝ其異端の變形なる新異端に陷り主耶蘇基督に於て人性は全く神性に併呑せられたるを以て彼には唯一の神性のみを認めざる可らずと主張せり(故に此異端を「モノフィジト」派と稱す)二三の主教等はコンスタンティノポルの「パトリアルフ」(フラウヰアン)にエウティケイの異端に陷りたるを訴へ且宛も此時コンスタンティノポルに開設せる地方會に於てエウティケイの説を審議せん事を請求せり然るにフラウヰアンは平和を好むを以て爭論を起すを望まず此の如き理論上の問題に於て動もすれば輕卒に發したるの言に異端の旨意を附することあるを知り且つ今僅かに恢復したる平和を破ると恐れ私交上エウティケイをして其説の正理に背くを承認せしめんとして力を盡せしも其甲斐なかりければ公會は遂に其告訴を受理しエウティケイを招ぎて答辨せしめざるを得ざるに至れりエウティケイは再度會議に臨むを辞し三度目に漸く兵器を帶びたる護衛兵を隨ひて會に臨み主教等の問に對して曖昧の答を爲しフラウヰアンを輕蔑するの擧動をなせしが遂に異端の罪に定められ公會の議決に由りて其職を褫がれたり

エウティヒイは此決議に服せゞ其事を再審せんことを請求しけるゝ柔弱なるフェオドシイの宮中ゝエウティヒイを保護する有力の人々ありて彼等はフラウアンを誣ひて異端者なりとし皇帝に勸めてエフェスゝ公會を召集せしめたり(四百四十九年)ディオスコルは此公會の議長と爲りエウティヒイの教を以て正教ゝ適ふものとしフラウィアンを位より黜けたり是ゝ於てエウティヒイに心服する修道士等は曾てディオスコルの徵集したる白刃を帶ぶるの兵士と共ゝフラウィアンを襲ひ之を擊ちて傷を負はしめしが其傷甚重くしてフラウィアンは之が爲め數日を經て死せり此不法の公會は騷擾の間ゝ終り后世ゝエフェスの亂暴公會の汚名を遺せり

當時の羅馬「ババ」レヲを始め東方の諸主教は皇帝ゝ再び全地公會を召集せん事を請求せしがフェオドシイ帝は俄かに死し皇姉プルヘリヤ幷

ゝ其夫たる皇帝マルキアンは四百五十一年ハルキドンゝ第四全地公會を召集せり

公會は聖致命女エウフミヤの聖堂ゝ於て開かれたり來會せる主教六百三十人あり皇帝及び皇后之ゝ臨みフラウアンの后任者「パトリアルフ」アナトリイは其議長たりき此公會に於てエウティヒイの異端は罪せられエウティヒイ及びディヲスコルハ其位を黜けられて放逐せられ更ゝ再び「ヂストリイ」の異端を罪定し「ババ」レヲの書翰を朗讀せし後「耶蘇基督ハ眞神及び眞人なり彼ハ神性に由りて世の先きゝ父より生れ萬事に於て之と相均し人性ゝ由りてハ彼ハ時に於て至聖なる童貞生神女より生れ罪と除くの外萬事吾人と均し彼藉身后ハ一体ゝして混せゞ變せゞ分れゞ離れずして彼ゝ合したるの二性を有す」との定理を決議せり此のハルキドン公會ハ以前の三全地公會幷ゝ七地方公會ゝ於て

議定せし所のものを確定し且コンスタンティノポルの教座の羅馬の教座と權利同等として只其位置一歩を讓ることを議決せり

ハルキドン公會の後凡そ百年を過ぎたるも爭論紛議い兩派の間ゑ尙絶えずして一方いエウティヒイの異端と主張し一方いネストリイの說を主張し而して兩派俱ゑ教會諸父の書ゑ牽强附會の解釋を附し之を擧げて已の說の正理なるを證せんとせり此爭論の人心を擾亂せしゑと甚しく遂に再び第五全地公會を開設するの必要起り皇帝ユスティニアン一世い五百五十三年ゑ之を召集せり此公會い一も新定理を議定せずネストリイ及びエウティヒイを再び罪定するゑ止れり

皇帝ユスティニアンは自から祈禱文を以て耶蘇基督の神性及び人性を確認するの意を述べ而して此文は當時(五百三十六年)聖体禮儀の中ゑ加へられたり即ち左の如し

神の獨生の子幷に言や、死せざる者ゑして我等を救はんが爲め甘んじて聖なる生神女永貞童女マリヤより身を藉り神の性を易へずして人と爲り十字架ゑ釘うたれ死を以て死を蹈破りし基督神、聖三者の一として父と聖神と偕ゑ讃榮せらるゝ者や我等を救ひ給へ

然れども神學上の爭論は此後尙止まず更に救主基督ゑは其性ゑ應じて惟一の意旨ありとする新說起れり六百四十八年に皇帝コンスタンティは「パトリアルフ」の勸に從ひ正教の摸範と稱する勅令を發布し紛議爭論する事を嚴禁し犯す者は罰に處する事とし堅く公會の規律を遵奉すべきを命せり凡そ此勅令に逆ふ者は之を罰ゑ處しければ正教の純然たる保護者ゑして敵の嫉惡ゑ由り苦難を受けたる者少からず例之パ教會の聖人として尊敬する羅馬の「パパ」マルティン及び表信者マクシムの如き是なり

コンスタンチイ帝崩じてコンスタンティン四世の時代に至り六百八十年コンスタンティノポルに第六全地公會を召集せり此公會に列席せし主教百七十人あり審議討論せし後『耶蘇基督には其神人の二性に應じて混せず分れずして神人二個の意旨あるを認むべき事』を議定せり。後十一年を過ぎて再び教會の秩序に關する規律を審査するが爲めトルーリ王宮に公會を開き使徒規則八十五條、全地公會規則幷に七地方公會の規則を教會法として採用せり此公會はトルーリ公會と稱せられ又五六公會の稱あり何となれば此公會は第五及び第六公會と增補せしが如きものなればなり

此第六公會には眞理の熱心なる保護者たるイエルサリム「パトリアルフ」の秘書聖アンドレイも臨席せり後彼はクリト島の大主教となり敬虔なると聖教に熱心なるとを以て其名を著いせり彼い大齋の初日に

誦讀する悔改の「カノン」を作れり之をクリトの聖アンドレイの「カノン」と稱す後世ダマスクの聖イヨアンい此の「カノン」の「エルモス」を作れり

第十八　西教會の諸父

メディオランの聖アムウロシイ。　アムウロシイが皇帝フェオドシイを諫むる事。　福アウグスティンと其の母モニカ。　アウグスティンの幼時放縱なる事及び母の祈禱と愛とに由りて基督教に歸する事。　アウグスティンの主教職。　福イエロニム。　イエロニムのバレスティナに於ける修道幷に其の聖書の翻譯

聖アムウロシイの西に於けるは猶大ワシリイの東に於けるが如し大ワシリイ自らアムウロシイに已に類するの性質あるを認めたり二人共に聲望高くして能く人心を服し共に第四世紀の教會史上に偉績を

遺せり

アムウロシイは三百四十年頃に生れたり其家は羅馬の名族にして父はガルリヤ太守の重職を帶び殆と此一大國の主權を握れりアムウロシイの著作を見るも其傳記を見るも彼が己の名族より出でたると祖先及び家族の位置の高尚なるとを以て傲慢自負せし事なしと雖ども其の幼少より交際せし社會より影響を受けたること疑なし彼の性質たる命令するの風あり高貴の人と已の位置を同等に見做すの風あり彼は高貴の人を恐れず彼等を避けず反りて德義上已の卓越する所あるを確認し衆人に接する眞に有權者の如くせりアムウロシイは羅馬に於て教育を受けたりしが天性嚴正潔白なるを以て當時多く壯年の徒をして身を過らしめたる都會淫逸の風に染まざりき學業終りて後奉職せしが親戚知人の多きと其才智の卓越せるとに由りて忽ち昇進

せり伊太利の太守プローブい之を見るゝ及んで頗る其の政治家たる才能ゝ富むを見ワレンティニアン一世ゝ之を推擧してリグーリヤ太守の要職を授けたり

アムウロシイの任に赴くやプローブ之と訣別しつゝ汝往きて治理すること裁判官の如くせずして主教の如くせよと云ひしが此言い偶々預言と爲れり此外アムウロシイの傳記中其運命に關するの奇談二つあり其一は彼の幼時ゝ關す一日園ゝ於て搖籠ゝ睡りける時俄ゝ蜂の群飛來りて其身邊を圍繞けり乳母は驚き蜂を逐はんとせしゝ父い之を見て不思議の事ゝ思ひ之を止めけるに蜂の群は搖籠に近きて或は小兒の顔に止り或は其目ゝ止り或は其唇に止り遂ゝ其の開きたる口に攀入り又飛出でゝ毫も之に害を加へざやがて皆飛去り高く蒼天ゝ昇りて其形見えずなれり父は戰慄しつゝ心窃ゝ以爲らく是れ時至ら

ば『善言は蜂蜜の如く甘く其甘味い靈魂を醫す』と云ふの聖言小兒の身の上ゝ應じて彼の蜂が高く天に昇りし如く小兒の高尚なる意思い人人の心を和げつゝ之をして地より天ゝ昇らしめんとするの前兆ゝ非ずやと

又一の奇談はリグーリヤに赴任せし四年目に起れりリグーリヤ州の首府はメディオランゝして其主教座は羅馬の管轄を受けざ皇帝はミランゝ離宮を有して屢此ゝ行幸せりアリイ派の主教アウクセンティの死せし后メディオランの人民は皇帝ゝ其の後任者を定めんことを請願せしに皇帝は人民に其選擧を一任しければアリイ徒幷ゝ正教徒は己の仲間より主教を擧げんとして奔走盡力至らざるなかりきやがて聖堂に於て選擧を行ひしゝ爭論紛々として容易ゝ決せず両派激昂して殆と其極ゝ達せし時リグーリヤの太守アムウロシイ自ら其會ゝ臨み

紛擾せる集會に向ひて調和の演說を爲せしが述べ終るや靜肅の間にアムウロシイ主敎たるべし』といへる小兒の音聲突然堂內に響きたり衆員は此小兒の聲を以て神の諭示なりとしアリイ徒正敎徒俱に異口同音に『アムウロシイ主敎たるべしアムウロシイ主敎たるべし』と呼べり。アムウロシイは事の意外に驚き默然として立ち居るに其聲益々裂く人々黨派の軋轢を忘れ主が自ら此不可思議なる選擧を以て指示せるものなりとし共に之を愛敬するの情を起せりアムウロシイは未だ曾て主敎たらんと欲する望を起せしことなく彼は啻に神學的の敎育を受けざるのみならず此時啓蒙者の中に在りて未だ洗禮をも受けざりき然れども人民の望甚だ切なりしてアムウロシイは一歩を讓らざるを得ざるに至れり是に於て彼は正敎の主敎より洗禮と受け後順を追ふて敎會の諸職を經領洗後八日目に主敎に立てられたり兩派の敵

視せる人々はアムウロシイの德の高きを知り堅く之を信じて其職に適するものと認めたり

アムウロシイは主敎の大任を受けて后直に其の未だ曾て經歷せざる生活を爲し日々嚴重に主敎の職務を實行し每朝私祈禱終りて後奉神禮を執行し聖体禮儀を行へり且つアムウロシイは他人に敎誨すべき事を自ら學ばんが爲め希臘の註解者就中オリゲンの書に由りて熱心聖書の研究に從事せり

アムウロシイは常に普く人に接し何人も之を見何人も之と談話するを得たり凡そ扶助を得んとして來る者あれば直に講學を廢して其の言ふ所を聽き而して後講學に從事せり故に卑賤の者はアムウロシイを以て己の友と爲せり然れどもアムウロシイは亦富貴の人を斥けず敎會の利益を計らんが爲め高位顯官の人々と親密の交際を結べり

アムウロシイは日夜孜々として業を取り日曜日

及び祭日に當りて民に述ぶる所の說教を準備せり故に人民ハ之を愛しアムウロシイも亦人民と愛することと頗る懇切なりきアムウロシイハ德義力を殊に國政上に顯ハせりアムウロシイハ主教たるの先き政事家たりしを以て彼の主教たる時の働作にも其影響を及ぼせり彼ハ神靈上の高より此世の權勢に眼光を注ぎ卓然悠然として鬪爭をなせり

アムウロシイハ主教と爲れる初年聖堂に於て皇帝ワレンティニアン一世の面前に於て諸大臣の大權を濫用するを譴責し毅然恐れざるの意を示せりワレンティニアン二世の時代に於てアムウロシイハ大に異教の撲滅に力を盡せり當時異教ハ東方に勢力微々たりしも西方には其根底尙甚だ强くして羅馬の上流社會ハ猶舊教を固守し其の眞理を信ぜるにあらざるも傲慢の情よりして祖先の遺傳を棄つるを欲せざり

き且つ當時異教は高職に登用せらるゝの妨害とならざりき偶々元老院に於て羅馬の貴族は基督教派と異教派の二派に分れ凱旋金像の祭壇一條に就て兩派の間に劇烈の爭を起せり此祭壇は太古より元老院に建てありたるをコンスタンティン帝命じて之を毀たしめしが異教派の人は新皇帝ワレンティニアン二世に之を再立せんことを請願し奔走盡力至らざるなかりき時にアムウロシイは正教の眞理の充分勝利を得べきを確信して大に之を反駁せり彼れ皇帝に書を上りて曰く『主教は教會に反對するの議決を許容する能ハず陛下若し彼等の請願を容れ給ハゞ之に由りて教會の親與を絕たるべし陛下ハ聖堂に來るを得べきも彼處に於て司祭を得ざらん縱令之を得るも陛下に敵對する者ならん

皇帝ハ遂に異教徒の請願を容れざりき。異教は未だ全く絕滅せざるも

現に衰頽に傾けりアムウロシイハ異教徒と爭ふに於ては全幅の力を盡すを要せざりしもアリイ教を奉ぜる宮廷に對しては長く至難の鬪爭を爲さゞるを得ざりき

皇后エウスティナハ熱心アリイ教を奉じアリイ教の神品を近づけたりしがメディオランの大主教アムウロシイの勢力の熾んにしてアリイ教の勢力益々衰ふるを見て憤れり三百八十五年「パスハ」祭の時皇后は主教に命じてアリイ教徒に初め市外の一聖堂を讓らしめんとし後又市内の大聖堂を讓るべきを命せしにアムウロシイは斷乎として徐に之を拒絶せり皇后の使者ハアムウロシイに皇后の權勢にハ一歩を讓らざるを得ざるべきを勸告せしにアムウロシイハ答へて已に屬する者ハ悉く之を捨つべく生命と雖も尚且つ之を棄つるを惜まざるも苟も神に屬するものを讓るは自己の意見を以て爲すべきにあらずと云へ

り曰く神の聖堂は司祭之を放棄する能はゞ而して皇帝は神に屬するものを左右するの權力を有せゞと市民は頗る激昂し街上に於てアリイ派の一司祭を執へ殆と之を殺さんとしアムウロシイ僅に之を制して其の危難を免れしめたり聖堂を占領すべき命を受けて遣はされたるの兵士は正教に移るの意を表し其の聖堂に來れるは主教の祈禱に加はらんが爲めなりと明言せし者多かりき

是に於て皇后は遂に一歩を讓れり然れどもアムウロシイは其爭の未だ終結せざるを洞見せり翌年果して勅令を以てアリイ教徒に諸聖堂に於て奉神禮を行ふの自由を予へられ之を拒む者は死刑に處すべしとの嚴命を發せられ正教徒の驚愕一方ならざりしが又之に次ぎてミランの聖堂をもアリイ党に渡すべしとの命令を再び發せられたり時に主教アムウロシイは毅然として皇帝の恐るべき無限の大權と爭ひ

其決心を翻さず前任者より讓り受けたる所の者は決して之を放棄するを得ずと答へたり。皇帝はアムウロシイよミランを去るべしとの命と傳ひしよアムウロシイは已の牧する信者を棄つる能はざる旨を確答して其命を拒みたり人民はアムウロシイの生命を危みければアムウロシイは其請よ從ひ數日間晝夜涕泣祈禱する信徒の間にありて一歩も聖堂の外よ出でず信者の祈禱を以て城壁となせり聖堂の周圍よ立てる番兵は聖堂に入ることは何人にも之を許せしも出ることゝ決して之を許さゝりけるに來りて聖堂よ入る者陸續絶えざりければ皇后は遂よ已の力の及ばざるを悟り主教の全勝と爲れり

三百九十年よ一大事件起れり偶々ソルンの民反逆しけるよフェオドシイ帝大よ怒りソルンの叛民ゝ其の首謀者たると連累者たるとを問はず悉く之を刑に處する事を命せり主教アムウロシイは皇帝よ大赦す

べきを諫めたるも皇帝の意を迎ふる宮中の佞臣等は其諫を容れざらしめたり數日を經て皇帝は其事の非なるを悔ひたるも勅令は已に彼の地よ遣はされたり一擧叛民を屠らんとし欺きて鬪獸場よ一大演劇を催しけるよ人民は群を爲して來りければ俄よ四方の戸を閉ぢ兵士ゝ白刃を揮ふて躍り入り悉く之を殺戮せしかゞ僅か三時の間よ男女老幼を問はず殺さるる者四千人の多きよ及べり此殺戮の報一たび國中に流布するや到る處に人民憤懣の聲を揚げ正教を奉ずる皇帝を以てチロンに比し衆民皆教會よ目を注ぎアムウロシイの出てゝ之を譴責し之が報讎を爲すべきを豫期せしよ果然アムウロシイは侮辱せられたる人類の爲に出てゝ防げり此時偶々皇帝ミランよ來らんとせりフェオドシイとアムウロシイゝ共に剛毅不屈にして自ら信ずること厚く且互よ親友よして相愛し互よ能く意中を知れるを以て大罪を犯せ

る當時皇帝を見るはアムウロシイの忍ぶ能はざる所なり是を以てアムウロシイは自らミランを避け皇帝に舊約預言の精神を帶ぶる有名の書を上れり

其書に曰く我は敢て默々たる能はず又犯罪を寛容する能はず我陛下に悔改すべきを勸む陛下は人なり故に人として流涕し己を賤うして神の前に立ち以て悔改せざる可からず

我陛下に此罪を速に國中より除去せんことを勸告す神使と雖も將た神使長と雖も之を除去する能はず唯獨り悔改する者の主は陛下の罪を赦すを得べし我は陛下を愛し陛下れ爲に祈る然れども我は陛下の前に於て無血祭を獻せざるを知れ陛下若し我を信ぜば幸に我の諫を容れよ若し信ぜずんば我を怨せ我は陛下よりも神を貴しとなす』

かくて皇帝はミランに至りしが主教アムウロシイの上書を顧みず例

に由りて聖堂に臨みければアムウロシイは聖堂の入口に於て厲聲之を止めて曰く爾は主の前に罪を犯せり爾は何の足を以て彼の殿に入らんとするか何の目を以て彼の美を見んとするか爾は如何して祈禱に於て血に塗れたるの手を擧げんとするか去れよ罪を以て罪に重ぬる勿れ』と時に皇帝は詰りて『ダウィドも罪を犯せりされどダウィドに赦されたり』と云ひしにアムウロシイ答へて曰く『爾は罪を犯す事に於て彼に倣へり須く又彼の悔改に倣へよ』

皇帝は悔改せり彼は實に世人の前に罪を犯せり故に其悔改も又其犯罪の如く公然たりき即ち皇帝にアムウロシイの言に從ひ八ヶ月の間神の聖堂に入らず之より斥けらるゝを以て恰も天國より斥けられたるが如き思を爲せり遂に主教に皇帝に他の悔改者と共に聖堂に入るべき命を傳へければ皇帝は堂に入り其中央に立ちて涙を垂れ慟哭し

て『オヽ神よ爾の言ふ由りて我を活し給へ』と反覆しつゝ赦罪を祈り公然其罪を告解せり

斯く羅馬大國の傲慢なる君主は神の役者が何人と雖も免ること能はざる德義法を以て降福し若くは詛ふが爲め其手を擧ぐるの權と有するを認めたり

アムウロシイはフェオドシイの死後其墓の上に於て述べたる吊辭に於て二人の友愛の情厚きを顯はせり曰く『我は此の慈悲恭謙にして潔白温厚なるの人を愛せり我は此の苦諫を容れて諂諛を斥け己の王たる威嚴を顧みず公然聖堂に於て罪を悔ひたるの人を愛せり通常の人の恥とすべき公けの痛悔も此の皇帝は甘んじて之を受けたり我は實に彼を愛せり故に眞に追悼に堪へず吾主は此の惡意なき靈魂を送るの祈禱を納れ給ふべきは予の堅く信ずる所なり』

神の大司祭聖アムウロシイは三百九十七年の大土曜日に安然として世を逝れり

聖アムウロシイは當時東方教會の採用したる和唱詠歌を西教會に採用せり曾てイウスティナの窘逐に際し正教徒皆憂愁して聖堂に集りし時アムウロシイは人心を勵さんが爲め唱歌者を両段に分ちて交々聖歌及び聖詠を謳はしめたり又アムウロシイは全くアリイ黨に勝利を得たる後神や爾を讃め揚ぐ云々の嚴なる感謝の歌を作れり此歌は東西両教會一般に今日に至るまで採用する所なり且つアムウロシイは東教會の風習に準じてミラン教會の奉神禮の面目を一新し新に聖体禮儀の式を作れり

アウグスティンは三百五十四年亞弗利加の一市タガスタに生れたり。其

母モニカは年若くして異教人に嫁せしが其人疎放ゑして不品行甚しかりしがモニカは貞淑温柔にして能く夫ゑ事へ之をして已の行の標準とせし聖規を敬するの心を起さしめ已の行を以て之を感化し遂ゑ基督教を奉せしめたりモニカは事大小となく常ゑ人の爭を調和し其怒を和ぐる事を務め獨り一家の爲めのみならず比隣合壁の爲ゑ力を盡せりモニカは殊に其子の教育に意を注ぎ之ゑ神の道を教へたりしが長子アウグスティンの爲ゑ苦心流涕せしこと甚しくアウグスティンの自ら言へる如く彼が不信の幽暗ゑ彷徨ひし時祈禱と熱涙とを以て之を生命に更生せり

アウグスティン謂て曰く『主よ予は幼少の時より吾人ゑ降臨し給へる爾の子の謙遜に由りて吾人ゑ賜へりたる永生の事を聞けり爾を以て獨り恃みとせし我母は我を生むと問もなく我が顏ゑ十字架の記號を畫き我をして爾の奥妙なる鹽を味はしめたり』とモニカは斯の如く領洗ゑ準備せしも未だ之ゑ機密を受けしめざりきこれ當時往々成年に至るまで領洗を延引するの風ありしが故なりアウグスティンは幼少の時危篤の病ゑ罹り自ら洗禮を受けん事を請ひしも病愈るゑ及んで又領洗を延期せり

両親ハ習學の爲めマダウルといへる町ゑアウグスティンを遣ハせしに學業著しく進歩せしが同窓の友ゑ誘はれて十六歳の時より放蕩ゑ耽れり父はアウグスティンの能辨學ゑ長ずるを喜びたりしが母は其子の不品行を聞きて深く悲めりアウグスティンの一時學校より歸省せし時モニカは既ゑ其子に確乎たるの信仰なく道德を重ずるの心なく心の潔白を失へるを見て益々痛嘆せり

アウグスティンの再びカルフゲンゑ遊學に赴くゑ及んでモニカ大に心を痛め居りしが夫の死せし后自か

らカルファゲンに移りて其愛子と同居せり然るよ此愛子は后尚久しく母をして涙を流さしむるの種となれり。アウグスティンは不品行甚しく其情慾を縱よし遂よ全く邪教に惑溺して神を誹謗しければ母は之を恐れて其の家よ居るを禁ぜるに至れりモニカは靈魂の生命と救贖とを以て何よりも貴しと爲しければアウグスティンを死せる者の如く見做して泣き悲み日夜涙を流して神よ祈り其子の悔悟せんことを願へりアウグスティンは痛悔の中よ呼んで曰く『主よ此時爾は尚天の高きよりも手を我に垂れ給へり爾よ忠なる婢の祈禱と涙い爾を感動せしめたり彼が我が爲に泣き悲めることと慈母が死せし子の爲よ泣き悲むよりも甚しかりき何となれば彼は我を以て爾の爲に死せし者と見做したれば主よ爾い彼よ聽き給へり爾い彼が爾よ祈禱を捧ぐる毎よ溢るゝが如く注ぎたるの涙を斥け給いざりき彼をして其心を慰むるの

夢を見せしめ再び我をして彼と共よ居るを得せしめ我が邪説に惑いされし時より我をして就くことを許さゝりし食卓に就きて彼と共よ食ふことを得せしめたる者い主よ是れ爾よ非ずや』と

モニカ一夜夢に憂よ沈みて細長き路に立ちけるに容貌輝きて愉快の色を爲せる神使の忽焉として己に近づくを見たり神使い懇よモニカに向ひ『何故日々此の如く流涕するや』と問へりモニカ憂鬱として『我いが子の靈魂の亡びたるよ由りて泣くなり』と答ひければ神使は微笑しつゝ謂て曰く『恐るゝ勿れ反顧りて看よ爾の立つ所に彼も又立てり』とモニカ回顧せしに夢の中に果してアウグスティンが己の側に立つを見て喜ぶこと限りなし后アウグスティン謂て曰く『母い我よ此夢を語りし時我い此夢の意い母上が我が説を受くることを示すものなりと説明せんとしけるよ母い答へて否然らず神使は我よ告げて我い爾の立

つ所よ立つと云へず乃ち爾ん我と相併んで立つと云へり』

此のモニカの爲めよ喜ばしき望ん尚未だ速に應せざりきアウグスティンん九年の間不品行と邪敎の暗に彷徨へりモニカん一主敎よ其子を諭し悔悟せしめん事を乞ひけるに主敎答へて『時機未だ至らぎ暫く彼を放棄して彼の爲よ祈れよ』と云へり。モニカ涙を垂れて切よ主敎よ乞ひけれど主敎之を慰めて曰く『汝は心を安んせよ只斷えぎ祈禱すべし此の如く涙を垂るゝ者の子ん亡ぶるの理なけれどなり』と

アウグスティンん母の止むるをも聞かず羅馬よ往きて能辨學を敎授せり間もなく危篤の病よ罹りしが此時ん己よ全く信仰を失ひたるを以て領洗を願んぎ却て聖機密を嘲れり然れども神の審判は測り難く其踪跡は索ね難し（羅馬十三）時よ偶々ミランにて能辨學の敎師を聘せんとし羅馬の太守シンマフに之を請ひけるに太守はアウグスティンよ其

任を授けたりアウグスティンはミランよ至りて一日著名なるアムウロシイの說敎を聞けり后アウグスティン謂て曰く『我は知らず識らぎ神に由りて彼よ導かれ而して知りつゝ彼より神に導かれんとせり』と

主敎アムウロシイは常の如く懇よアウグスティンを遇待ひしにアウグスティンは一見直に其威望よ壓せらるゝを感じたり此よりアウグスティンは人民の充滿せる聖堂よ立ちてアムウロシイの說敎を聽くを以て樂とし時の移るを知らざりきアウグスティンはアムウロシイの說敎の能辨なると其容貌の雄偉なるよ恍惚とし初めは只之を聞くを以て樂とせしが漸次其心に感動を起して知らぎ識らずアムウロシイの言ふ所の事を信ずるよ至れり

アウグスティンは遂にアムウロシイよ請ふて啓蒙者よ加はれりモニカは其子が啓蒙を受けんとするの望を起せるを聞きて大よ喜び益々熱

心に祈禱して己の願の遂ぐるを待てり

アウクスティンは己よ基督教を以て救贖を得る唯一の道と見做せしも情慾の念と不品行の習慣容易よ棄て難く眞理を望むの心と迷謬よ戀たるの念とよ其心を煩いされ叫んで曰く『主よ我を救ひ給へ然れども尚未だし』と後アウクスティンは聖使徒パウェルの書を研究するに及んで深く感動し豁然として悟る所あり慢心漸く挫け新生命よ入るの曉已よ近づけりアウグスティン謂て曰く『主よ爾の言い深く我心を貫けり我い四方より恰も爾に圍まれたるが如くなりき我は永生を見る事恰も曇りたる硝子を經て見るが如く想像的に見るに過ぎぜと雖も己よ之を疑はず我は己に爾が有らゆる萬物の唯一の源なるを悟れり我に い爾に就かんとするの外他の望なし……然れども基督教徒の生活を爲すの事よ關しては我尚躊躇せり我が心は未だ舊習慣より清められぜ

我は救世主を得たると眞道を知れるとを以て喜びしも未だ此狹路よ蹈入るの決心なかりき』

アウグスティンの同國人ポンティニアンと云へる基督教徒偶々アウグスティンを訪ひしが談話の際偶然机上に在るの書を取りて之を見たるよ其書い思ひ懸けなき使徒パウェルの書なりければ且つ驚き且つ悅んで之に主の事並よ信仰の勢力等よ就きて說き始め埃及よ於てアントニイと云へる人が甘じて赤貧となるべき福音の言を聞きて感ずる所あり直に悉く財產を擲ぎて一身を神に獻じたる事を告げ且つ基督を愛する熱心の人々が貴賤の別なく此世を捨てゝ曠野よ避け修道院に入りて祈禱を爲し乏しきを忍び自ら勞して主に務むる者多きを告げたりアウグスティンい聽き了りて深く感動し其の震へる音聲と容貌に心中の擾亂自ら顯いれたり斯くてアウグスティンい庭よ出でたりしが心

中に恐怖充滿し其心に慕ふ所の者に從ふの決心鈍きを自ら責めたり彼謂て曰く主よ爾に就くが爲にも車を要せず舟をも要せず唯意旨を要せしのみ而して其要する所のものも疲れ果てたる戰に於て或も靈魂を天に擧げ或も之を地に引き下ろす薄弱孤疑的の感情に似ざる確乎たる意旨なりき』

アウグスティンは內心の戰に疲れ果て必ず涙にて破裂すべき大嵐の其心に起らんとするを感じ地に俯して流涕慟哭せり彼謂て曰く『涙も河の如くに流れたり而して主よ爾も之を爾の喜ぶ所の祭りとして受け給へり我も爾に呼んで云へり主よ爾の我を怒るも幾何時ならんとするか願くは我が既往の罪惡を記憶する毋れと我も實に此惡に心を苦しめらるゝを感じ心の中にて主よ孰れの時なるか明日か果た明後日か何故今直に我をして此汚辱を免れしめ給はざる乎と反覆せり我も

慟哭流涕して之を反覆するの間俄に小兒若くは小女の聲として『取りて讀め取りて讀め』といふを聞けり我も恐懼色を變じ小兒の歌を反覆する戲れに非ざるかと回顧しけるに一も此の如きものあらざりければ遂に聖書を翻きて我が目に觸るゝ所を讀む可きを命ずる神の聲なるべしと悟れり嘗て聞くアントニイも聖堂に於て爾往て所有を賣りて之を貧者に施せ、さらば寶を天に有たんと云ふの言を聞き神の命令として之を受けたりと故に我立ちて曾て聖書を置きし所に至り之を手に取りて翻きけるに目に觸れたるも左の言なり曰く饗餐沈湎好色邪淫爭鬪娼嫉に耽る勿れ乃ち宜しく主耶蘇基督を衣て肉体の爲に慮り其慾を成すを致す勿れ』（羅馬十三）

アウグスティンも讀み了りて書を掩へり蓋し福音の光も其靈魂の幽暗を照したるが故に既に之を讀むの要なかりしなりアウグスティンも母

の許に至りしにモニカは其容貌を一見して直に意中を悟れり即ち主ンモニカの祈禱よ報いて其の願ひしよりも更よ多く之よ賜へりモニカン其子の憂しき眼よ喜びの溢るゝを見て神の愛の眞味の其心よ入りたるを悟れり

此よ於てアウグスティンハ一書よ已の履歴を認めてアムウロシイよ送り領洗するの許を請ひ數日の間伊太利の山中閑靜の所よ避けて新なる生活に移るが爲め其心を備へたりアウグスティン祈りて曰く『主よ我が靈の家ハ狹くして爾を受くること難し、されども爾に由りて廣めらるべし此家ハ頽破せり願くハ爾之を恢復せよ彼ハ痛く爾の目を辱めたり我ハ能く之を知るされど誰か之を清むる者ぞ爾の外我誰よか呼んアヽ主よ願くハ我を我が秘密なる罪より清め給へ』と遂よアウグスティンが恐れ喜びて希望せし時至り三百八十七年の「パスハ」祭の前日

よアムウロシイより親しく洗禮を受けたり

アウグスティンハ領洗して白衣を着るや是より先きアムウロシイの作りたる『神や爾を讃め揚ぐ云々の讃美歌を歌へり蓋し此歌ハ當時領洗者幷よ洗禮を執行する者共よ謳ひたるなり此奥妙なる歌を謳ふと共よアウグスティンよ恩寵降り心よ眞誠の樂を覺え始て神よ於て安慰を得たりアウグスティン謂て曰く『爾の我を造り給ひしハ爾の爲なり故よ我心ハ爾を得ざる間ハ乱れて止まざりき』

アウグスティンハ洗禮を受くると間もなく母モニカと共よ故郷よ歸らんと決心せしが出帆するよ先ち數日の間地中海の海濱のオスティヤと云へる所よ滯在せり

アウグスティンは大ワシリイの如く森羅萬象を愛し天然の美妙を觀るを以て樂みとなし就中蒼海の光景を見るを以て常に樂みとせしが皎

皎たる月夜に銀波の洋々たるを見て深く感せしゐと未だ曾て此時の如きはあらずアウグスティンも母も此光景ハオスティヤゐ於ける最後の夕景なるべしと思ひ無量の感を催せりアウグスティンが此時の母子の談話を記するの一條一讀感ゐ堪えぞ二人窓下に坐して眺むれバ蒼々たる晴空ゐ星宿燦爛として輝き渺茫無邊の蒼海ゐは月光映ドて四面寂として聲なく心自ら天に向へり母子の談話樂くして盡くる時なく心全く此世を離れて無形靈妙の者眼前ゐ有るが如き思を爲し此世以外の樂を覺えて爾は我主の樂ゐ入れよと呼ぶ聲の響き渡る幸福の時に遭遇せしが如くなりきモニカはアウグスティンゐ謂て曰く『我子ゐ妾の此の世に生存へんと欲せしは唯爾をして眞誠の樂を得せしめんと欲するが爲めのみなりしに今や我の神は我が願ひしよりも豊かゐ我ゐ賜へり我い爾が神に事ふる者となれるを見又爾の寶の何處ゐ在る

やを知る我今死するも遺憾なし』と翌日出帆せんとせしにモニカは俄に發病して延引せしゐ數日を經て世を去れりモニカは實に母たる義務を尽し基督教徒の母たる者に母の祈禱と熱涙の勢力強くして纖弱なる婦女子も信と愛ゐて奮勵せバ多くの働を爲し得べきを示せりアウグスティンは潔白幸福なる母の靈魂の永生ゐ移れるに由りて涙を流すは却て罪なるを知るも此の己を守れる善人の亡人となれるを思ひて泣き悲まざるを得ざりきアウグスティンはやがて故郷ゐ歸り財産を鬻ぎて貧者ゐ施し自ら修道士と爲りて三年間閑靜の地ゐ住み苦行を爲して世を送れり

三百九十五年アウグスティンはイッポンの主教に撰バれたりアウグスティンハ曾てアムウロシイより主教の位と主教の權の事ゐ就き高尚なる説明を聞きたるも其性質の温和なるに由て己の師アムウロシイの如

く其權を充分ゑ實行するを得ざりきアウグスティンハ貧者の師とならんとし主教の位を受くるも質素なる舉動を改めず人に接するゑと懇篤にして三十五年の間主教たりしが其間アウグスティンハ説教を以て專らイッポン地方の貧困質朴なる人民を慰めたり彼の説教ハ高尚なる神學上の奥妙なる議論を含まざるも深く人心を感動し己の牧する信者を基督教徒の行ふべき道に導かんと欲する熱愛熱望顯ハれたり彼の心ハ常に燃ゆるが如く其信仰甚だ篤かりしを以て其言ハ自ら多くの人心を啓發し之を基督教の愛ゑ堅めたり其著書の如き神學上の説ハ悉く教會の嘉する所ゑあらざるも敬虔なる基督教徒に取りて得難きの寶なり

アウグスティンハ一身を犧牲として教會ゑ務め信者を教誨すると共ゑ孜々として當時西方ゑ蔓延せし異端者の説を駁することを務めたり

アウグスティンの著述中ゑハ神學的及び哲學的の著書甚だ多く其中最も著名ゑして世ゑ知られたるものハ第一『告解』と題する書なりアウグスティンハ此書ゑ已の履歴を述べ幼時の迷謬と正教ゑ歸化したる事情を細述せり第二『神城』と題するの書なりアウグスティンハ此書ゑハ羅馬の破壞を目擊して慨歎の餘り大帝國及び萬國の運命を詳述せり

アウグスティンハ羅馬城のアラリックゑ暴掠せられて其城の陷りたるを目擊し又亞弗利加の盛大なる教會並ゑ已の管理せるイッポン教會のワンダル人に破壞暴掠せらるゝを目擊し四百三十年ゑ世を去れり

イエロニムハ西教會の著名なる師父の一人なり彼ハパンノニヤ及びダルマチヤの境なるストリドンの人ゑして(三百四十年ゑ生る)修道の嚴格なる行と異端を論駁せしとを以て名高く殊ゑ后世教會の寶とな

れる書を著いしたるを以て著名なりイエロニムハ天性快活よして想像よ富み少壯の時羅馬の華美驕奢の風よ誘ハれたりしが后悟る所ありて學よ耽り閑靜の地に避けて祈禱せり數年間荒漠たる曠野よあり て修道の業を爲し慾を制し情を絶ちて遂よ其心よ眞誠の安和を覺ゆるよ至れり后羅馬よ出でゝ當時神品の風俗の乱れたるを嚴責し羅馬社會の風俗矯正を以て任とせる敬虔の婦女を集めて羅馬の弊風惡俗を一洗するを務めたりイエロニムは說敎を以て又は書を以て假借する所なく世の弊風を譴責せしかバ大に世人の嫉惡を蒙り遂よ羅馬を去りてパレスティナに赴き神聖なる場所を巡視してウヂフレエムの洞窟の傍よ居をトせり。イエロニムハ此所よ住む事多年當時の基督敎社會をして憂愁痛歎せしめたる羅馬滅亡の後間もなく世を逝れり(時よ三百八十七年なり)。イエロニムが羅馬及ひパレスティナよ於て著ハせし所

の書甚だ多く其の四方の人々と往復せる書翰の如き當時の基督敎社會の狀態並よ風習を詳述して畫くが如し。イエロニムの著書中尤も貴ぶべきハ聖書の翻譯及び註解なり。イエロニムハ希臘語及希伯來語に深く通曉するを以て新舊約聖書の謄本の原文を考究對照し羅甸語よ之を翻譯せり此書ハ西敎會の採用して今日に至るまで用ふる聖書の基となれり

第十九「マホメット」教

「カリファト」の創設及征服

往古より亞細亞のアラビヤ半島に散居せるアラビヤ人若くハサラチン人は自らシム及イズマイルの子孫なりと云ひ夙に族長的の生活を爲し族長エミル及シエフの權力を以て數世の間其獨立を保てり初め彼等は日月星辰を崇拜するの宗教を奉せしが時を經るに從ひ化して一種の偶像教と爲り而して一族毎に亦自已の神を有して之を尊崇せしが彼等の間には古よりエウレイ人の教に似たる唯一の神の傳あり其神の名を「アルラ」と云へりアラビヤ人マホメットは新に一宗教を創始して此の種々の妄信的の宗教にて四分五裂せる獰猛勇武の人民を合

同せんと企て遂に其目的を遂げたり

マホメットは五百七十年アラビヤ人の偶像の大神殿のあるメッカ府に生れたり其父は偶像信者母ハ猶太人にして親戚の一人は基督教を奉する者なりきマホメットハ頗る想像に長トたりしが幼少の時より貿易の爲め四方に旅行して見聞を博むるの機會を得たり當時東方に教會の爭亂ありたるを以て異端岐教の熱心なる輩ハ遠く偏歷して到る處に聖教の說及び聖書の事件の物語を傳へたりしが聖書の謄本甚だ稀にして民間にハ主基督に關する妄誕の說流布せり憶ふにマホメットは此等の材料よりして基督教の事を推測せしならん斯くする間にマホメットは富める寡婦を娶りければ衣食に奔走するの要なきより閑に乘じて切に想像に耽れり已にして四十歳に達するに及び斷然商業を廢し閑靜なる洞窟の中に數年を送り遂にメッカに出て自ら神使長ガウリィ

ルより天の默示を受けたるの預言者なりと公言し異教を絶滅して猶大人並に基督教徒の壞傷せるノイアウラアム及び其他の預言者の教を恢復するの天命と受けたりと揚言せりマホメットハ耶蘇基督を以て大預言者なりとせり『神の外よ神なくマホメットハ彼の預言者なり』とハ是れマホメット教徒の常よ口よせし所よして此言よ於てマホメット教の精神を知るよ足るマホメットは簡短平易の言を以て其教を述べたりしが後世之を編纂して「アルコラン」と稱する一部の經書を作れりマホメットハ多く猶太教の風習を採用し又基督教の德義上よ關する法規を採用して施濟を行ひ齋を守り屢々祈禱する等の事を命じ多妻を許し已を信ずる者よハ死後天國よ至りて永遠の快樂を受くるを約し天下よマホメット教を播傳し神の敵たる基督教徒及び偶像教徒を絶滅するを以て神聖の事なりとして之を奬勵しアラビヤ人は新宗教を擴張する

が爲め全世界を征服するの天命を受けたりと揚言せり

マホメットの能辨なると其經典コランの文の婉麗なるとマホメットが奇談怪說を恰も事實の如く巧みよ述べたると其の性質幷よ當時基督教社會よ異端起りて紛擾を極めたるおと及アラビヤ人の宗派を異よして互よ相嫉惡せし等の事情ハ大にマホメット教の蔓延を速かならしめたりしがマホメットの門弟の布教よ熱心なるに由りて其教よ歸化する者ハ日々よ增加せりマホメットハ能く人民として充分よ己と信用し己を熱愛せしめ巧にアラビヤ人の勇武の氣象を鼓舞して其神聖の事と爲せる布教攻畧よ從ハしめ之に天運の免るべからざるを諭して危難を意とせず死を恐れざらしめたりマホメットハ直よメッカを占領し次でアラビヤ全國皆其教と權勢よ服しマホメット自ら宗教幷よ國政上の權力を掌握せり

マホメットハ此の如く權勢を得るヨ及びアビシニヤ埃及波斯コンスタンティノポル等ヨ使者を遣してマホメット教を遵奉すべきを促せり希臘皇帝イラクリイ斷乎として拒絶しけれバマホメットハ大軍を率ひて之を攻めんとせしに俄に死して(六百三十二年)其後任者アブケルクハ其志を嗣ぎて軍を起せりアブケルク始て「カリフ」即ち預言者の代理と稱せりアブケルク及び其後任者オマルの軍大ヨ利あり數年の間にシリヤ埃及パレスティナ等にマホメット教の傳ハらざる所なく此の數箇國ハ皆「カリフ」の權下ヨ服從するヨ至れり六百三十七年オマルイエルサリムを圍みしに人民ハ非常の勇氣を鼓して防禦すること二ケ月ヨして遂ヨ降れり「パトリアルフ」ソフロニイハ講和の談判を爲し主の墓幷ヨ基督教の聖堂を保存すべきヨとを約せしヨオマル約に背かざりしがソロモンの聖堂の跡ヨハマホメット教の禮拜堂を建てたり

第七世紀の間ヨカリフハ波斯アルメニヤカバドキヤを征服し亞弗利加を侵し遂に進んでコンスタンティノポルを圍みしに利あらざしてウザンティヤ帝國ヨ貢を納るヽを約せり「カリフ」等ハマホメット教を蔓延するを以て神聖の義務なりとし戰勝ちて後常ヨ敗國の民ヨマホメットを預言者と認むべきを命じ之に稅を課しマホメット教を奉ずるを諾する者のみ之を免れたり又大ヨ基督教徒を虐待し其教を罵詈し彼等が聖三者を拜し聖像を貴ぶを見て多神教を奉ぜる者と爲し偶像信者なりとせり是ヨ由りて或地方に於てハ基督教頗る衰頽し之と共に文化亦大ヨ衰ひ學校圖書館等多く毀たれたり「カリフ」オマルハアレキサンドリヤ府を陷れたる時(六百三十八年)埃及王の歷代蒐集せる文學上の珍書を藏せし有名の圖書館を燒かしめたりオマル謂て曰く『若し此等の書にコランに載する事を記せバ其要なし若し他の事を記載せバ是れ

唯害と爲らんのみ』と此の如くにして基督降世前凡そ三百年の頃より設立せられたるアレキサンドリヤ圖書館の貴重なる謄本い烏有に歸せり

マホメット教徒い到る所基督教徒を虐待しつゝ埃及シリヤ及メソポタミヤ等に於ける子ストリイ派及其他の岐教徒を保護せり是れ蓋し彼等の宗教を嘉せしが故にあらずして此岐教徒輩い基督正教徒を惡むの餘りマホメット教徒の有益なる同盟者及忠實なる臣民となりしが故なり

曾て神の旨に由りて繁榮を極めたる多くの正教會い此の如くにして不信者に毀たれ其權下に服從するに至れり。當時の敬虔なる人々い此災を以て基督教徒が互に爭論を事とし愛情信仰を冷かにし善良なる習慣の衰頽せしが爲に被れる神の罰なりとせり

第二十　聖像廢毀の爭亂幷に第七全地公會

レオ帝。聖像に對する窘逐。ダマスクのイヲアン女帝イリナ聖像崇拜を恢復する事並に第七全地公會を開設する事。ダマスクのイヲアン感動す可き歌を作る事。マイウムのマスマ、カッシヤ、詠歌者ロマンの事

東方に於ける正教會い之を擾亂せる異端を排除し漸く安堵の思を爲すと間も無く救世主神の母幷に諸聖人の聖像を注視しつゝ祈禱し之を尊崇する古來の敬虔なる風習を破らんとするの强迫に遭ひて復び非常の爭亂起れり

抑も聖像を尊崇することゝ古より教會に行はれ頗る信者の心を慰めたるの美風なれども亦時として弊害を釀生するの端と爲れり異教より轉宗せしより日尚淺く未だ全く偶像崇拜の古風を脫せざる輩ゝ動もすれば安信に陷り異教的の思想を以て之を聖像に移し聖像を崇拜しつゝ其像を見て追想すべき聖人其人を崇敬せずして異教徒の偶像を拜する如く聖像其者を以て神聖の者と爲すに至れり聖教會は常に此の如き安信を排擊すると共に愼んで古來の美風と保存せり第四世紀に於て神學者聖グリゴリイに此風習に就きて論ずるに當り博學知名の士に向ひ聖像ゝ世に多數を占むる無學無識の輩幷に凡夫凡婦を信仰の念を起さしめ之に教理を了解せしめ書の代用を爲すの益して信仰の念を起さしめ之に教理を了解せしめ書の代用を爲すの益あるを說きて此美風を保存し偶然に起る安信の爲に之を廢すべからざるを勸めたり

然るに第八世紀に至りて學識ある輩ゝ痛く此の古來の風習を攻擊し聖像を廢毀すべきを主張せり憶ふに當時マホメット教起り而して該教の主義として神聖なる像は一切之を排斥したるに由り學者輩ゝ之と交際するよりして自然マホメット教の主義に化せられたるや疑なし當時の皇帝レオイサウリヤ人（在位七百四十一年より七百十七年に至る）ゝマホメット教徒と戰ひ大勝利を得て榮名赫々たりしが聖像を破毀する時はマホメット教徒及び猶太人をして基督教に歸化せしむるを得べしと想像し聖像廢毀派に與みして熱心之を助けたり

皇帝は此の一大變革を計畫して人民に公告せしに同意を表する者なかりければ「パトリアルフ」に向ひて同意を求めたり當時コンスタンティノポルの「パトリアルフ」をグルマンと云ひ篤信にして淸廉潔白の人なりしが皇帝に對して聖像を棄てず民と共に死を以て之を守らんと確

答し一方には諸主教ゑ書を送りて教會に背くべからさるを諭し且つ聖像崇拜の眞意を説明せり皇帝は恐喝を以てするも將た甘言を以てするも到底「パトリアルフ」の承諾を得べからざるを知り教會の協贊を經ぜして斷行せんと決心し聖堂のみならず各人の家ゑ聖像を置くことを禁ずるの詔を發布せり（七百二十八年なり）是に於てゲルマンは位を黜けられて流竄ゑ處せられゲルマンの秘書となりて之ゑ背きたるアナスタシイは皇帝ゑ推擧せられて「パトリアルフ」と爲れり

詔を實施するが爲め四方より聖像を取上げて之を燒くべき命令を下し其第一着ゑ曾てコンスタンティン大帝が王宮の門前に建てたる救主基督の聖像を毀たんとし梯を懸け人をして之ゑ登らしめ槌ゑて基督の像を打毀たしめけるに人民は憤激擾亂して梯を倒し役卒を毆打して死ゑ至らしめたり國中到る處人民擾亂せしゑ有司は叛逆人として

之を嚴刑に處せり皇帝は怒ること甚く教師ゑして詔を奉ぜざる者あるときは命じて其學校を毀たしめコンスタンティノポルの文庫を司る者の一人古時の謄本ゑ聖像排斥説に反するの説あるを擧げたりとて其の廣大なる文庫と共ゑ文庫を司る者十二人を燒き殺し到る處修道院を毀ち庵舍を燒き聖像を侮辱し聖像畫工を窘逐せり東方ゑて此窘逐に遭遇せし輩は多く伊太利に避けて此ゑ聖像の畫法を傳へたり正教徒い四方ゑ逃れて危難を避くる者多かりしが窘逐者は之を追跡せしを以て其手ゑ捕らいるゝ者少からずされど正教徒は救主を始め其の諸聖人を聖像ゑ於て敬ふことを廢せんよりは寧ろ万苦を忍び受くべしと公言せしを以て獄ゑ四いるゝ者多く牢獄は此人々にて充溢れたり主教の中皇帝の歡心を得んとして聖像排斥説ゑ與せし者い人民之を蔑視し聖像の爲ゑ苦難を受くる者は聖なる致命者として之を尊

敬せり當時信者い聖堂及び家より聖像を取去りて窃み之を尊崇しダマスクの聖イヲアン、マイウムのコスマ及ゲルマンの如きい高尚の歌を作りて生神女及び諸聖人を讃美したり

皇帝は羅馬教會をも己の説に從はしめんとせしに「パパ」グリゴリイ二世グリゴリイ三世共に斷乎として其説を斥け且書を皇帝に上りて其事の無智なるを諫めたり此の殆ど百年間打續きたる東方教會の紛擾せる時代に羅馬祭司長の毅然として其心を動かさいりし一事は西方諸國に「パパ」の勢力を張るの助けとなりたること少からず

當時敬虔博學雄辨を以て基督教社會に名聲藉甚たるダマスクのイヲアンは侃々諤々聖像廢毀説を論駁せりイヲアンは其生亞剌比亞人にして基督教を奉する者なりしがマホメット教社會の尊敬を得ダマスクに於てシリヤと領せし「カリフ」に仕へ重職に任せられたりイヲアンは

其身マホメット教國に在るを以て希臘皇帝を恐れずして正理公道の爲に公然之と論爭するを得聖像崇拜の辯護論三篇を著はし其名聲益々揚れり此論コンスタンティノポルに非常の影響を及ぼし正教徒を大に奮勵せしめければ皇帝の逆鱗甚く遂に「イヲアン」を「カリフ」に讒して之を滅ぼさんと決心せり皇帝はイヲアンより己に宛てたる僞書を作り書中にイヲアンがダマスクを已に賣らんとするの文意を含め之を「カリフ」に送りしに「カリフ」見て其讒言を信じ怒りてイヲアンを罰せりイヲアンの傳記に據るに「カリフ」は命じて其右手を斫らしめたるに至聖生神女の奇跡的の佑助に由りて其手新に生じけれバイヲアンの無罪なること表明したるもイヲアンは既に「カリフ」に事ふるを好まずダマスクを去りて聖サッワの修道院に入り嚴格なる勤行を爲して餘生を送れりと云ふ

聖イヲアンの死後聖像廢毀説の氣焔益々熾ゝして東方の諸教會之ゝ壓服せられたり、七百四十一年に皇帝レオ死して其子コンスタンティンコプロニム位を嗣ぎしがコプロニムゝ人と爲り猛惡殘忍狡猾ゝして酒色ゝ耽り聖像廢毀を主張すること最も熱心にして教會之が爲に三十四年ゝ間頗る苦められたりコプロニムゝ七百五十三年ゝ聖像廢毀党の主教三百三十人を集めて公會を開き聖像を廢毀し聖像を尊崇する者を罰するの決議を爲せり是に於て最も殘酷なるの窘逐起り聖像の爲に致命する者其數を知らゞコプロニムの子レオも亦聖像廢毀を主張せしがレオ崩じて後敬虔なる皇后イリナゝ夙ゝ聖像を尊崇せしを以て窘逐の令を廢し正教を奉するの「パトリアルフ」タラシイを舉げてコンスタンティノポルの教座に就かしめ且つ其勸めゝ循ひ教會の爭乱を鎮定するが爲め全地公會を召集するゝ決せり然れども當時コン

スタンティノポルゝ聖像廢毀党の勢力甚だ熾んなりしを以て公會を此ゝ召集すること能ゝず七百八十八年ニケヤに召集しタラシイ議長と爲り主教の會せし者三百六十七人ゝして羅馬「パパ」アドリアンより遣ゝされたる者も亦其内ゝあり此公會ゝ第七全地公會にして聖なる正教會の教理を確定せる全地公會ゝ之を以て最後と爲す公會ゝ聖書に基づき且つ諸聖父の書ゝ載する證に據り聖像尊崇説を確定して『須く聖像を尊崇し且つ之を拜する神の如くせず乃ち神及其の諸聖人の記憶的畫像として拜すべし』と公言せり聖像廢毀異端に伴ふ枝葉の諸説ゝ公會皆之を排斥し諸教會ゝ公會の議決を報告せり羅馬教會亦全く之を採用せり

然れども聖像廢毀の爭乱は此公會にて未だ全く其局を結ぶゝ至らざりきイリナ帝位ゝ在ること久しからゞ之ゝ代れる皇帝及び其後嗣者

ハ正教を奉ずること堅からぎ而して八百十三年アルメニヤ人レオ帝の帝位ゑ即きし時よりミハイル帝フェオフィル帝の時代共ゑ聖像及び之が崇拝説を主張する者を窘逐し其の殘酷なること**コプロニム**の時に劣らざりき時ゑ正教徒の之が爲ゑ血を流し致命せし者少からず聖**フェオドル**ストゥデトの如き最も教會の稱讃する所たり遂ゑ八百四十二年正教を奉ずる女帝**フェオドラ**大權を掌握するゑ及び命じて地方公會を召集せしめ再び全く聖像廢毀の異端を罪定し正教勝利祭を設けたり正教會は現時に至るまで大齋期の初めの日曜日ゑ此祭を執行す此の聖像廢毀の異端たる教會ゑ茶毒を流せしこと百年の久しきゑ亘り聖像と共に學術技藝文化を廢滅し良心の自由を害せしこと甚しく此ゑ至りて漸く其局を結べり修道院の破壞せられたるもの其數を知らぎ貴重なる謄本の灰燼ゑ歸せしもの亦少からず

此の教會の爲ゑ困厄極まるの時代ゑ於て窘逐烈しく行はるゝの間に聖歌の作られたるもの甚多く現時ゑ至るまで聖堂ゑ於て之を謳ひ正教會奉神禮ゑ一美觀を添ふ聖像崇拜の大熱心家**ダマスク**の聖**イヲアン**の如き聖歌作者中の最も錚々たる者なり**イヲアン**は世の顯榮を顧みず名譽を棄てゝ**イエルサリム**の傍ゑある聖**サッワ**の修道院ゑ入りて修士と爲れり傳へ言ふ**イヲアン**修道院ゑ至れる時其名世ゑ高かりしを以て初め之を容れて己の門弟と爲さんとするの修道士一人もなかりしが一老人漸く之が師と爲るを諾したり老人ハ門弟**イヲアン**に負いしむるゑ嚴重なるの順從と勞働とを以てし特に其の謙遜を試みんが爲め之ゑ知識的の作用を禁じたり**イヲアン**學を好み就中歌を作るを好みしを以て老師の命其身ゑ取りて甚だ忍び難かりしも謹んで其命を奉ゝたり一日偶ま同輩の痛く兄弟の死を悲む者あり涙を垂れて

イヲアンは來り追悼の歌を作りて其の憂情を消せんことを懇請しけれバイヲアンは其憂悲を見るに忍びず老師の命を破り有名なる追悼の歌を作りたり今日に至るまで埋葬の際歌ふ所のものとして『如何なる浮世の娯樂とか悲み伴はざる、人い何爲ぞ徒に狂奔するや、人事は皆虛なり』と云ふの歌是也老人之を聞知りてイヲアンを己の庵舍より放逐せしにイヲアン流涕して罪を赦さんことを請ひければ老人い遂に之が罰として修道院の厠を悉く掃除するを命じ此命を行ふに及び再び容れて門弟と爲すべきを承諾したり是夜神母い老人に顯はれてイヲアンに負いしめたるの禁を釋くべきを命じければ救主生神女及諸聖人を讃する絶妙の靈歌イヲアンの口より湧出たり夫の快絶の言を以て天地の大勝を得たること死と地獄に勝ちたる者の爲に歡喜悅樂すべきことと幷に天下萬民の復活を熱切希望すべきことを述ぶる復活

大祭の歌いイヲアンの作る所なりイヲアンい又聖詠の句を以て和唱歌を作り又主の大祭日に誦する「カノン」及「イルモス」等をも多く作れり日々の奉神禮の順序を規定せる八調經をイヲアンの編みたるものにして敎會音樂の基礎と爲れる八調歌の如きもイヲアンの作に係れりイヲアンい敎會を擾亂する異端の爭に鑑みる所あり歌を以て平易明白に聖三者のおと神子の藉身のこと至聖生神女を尊ぶべきことの定理を述ぶるの必要なるを感じ晩課の奉事に誦する八調の定理歌を作れりイヲアンの作れる聖歌及び祈禱文い彼の生時既に奉事禮中に採用せられたるもの多し

ダマスクの聖イヲアンは其の著書を以て東西敎會の大師と爲れり此時に至るまでは學理的に基督敎の眞理を叙述したる神學上の著書なかりしがイヲアンい始て現時に至るまで正敎會の爲に神學の基礎手

引となるの書を著し題して『正教教理要論』といへりイヲアン亦教會に起れる異端の歴史を編纂し初代より彼の時代に至るまでの沿革を詳記せり

イヲアンと偕に聖サッワの修道院に勤行せし同輩中にコスマといへる者あり後マイウムの主教と爲りしが此人亦イヲアンに傚ふて絶美なる靈歌を作れり聖枝祭、神母就寢祭、擧架祭、五旬節、大金曜日、大土曜日等に誦する「カノン」幷に受難週間に誦する三歌頌に共にコスマの作る所なり神母の讃歌へルウィムより貴く云々の歌（大土曜日の第九の歌）もコスマの作る所なり聖フェオドルストゥディトも亦「カノン」聖歌等を多く作れり此外に教會の大作歌者二人あり修道女カッシヤ及び詠歌者ロマン是なり

カッシヤは第九世紀フェオフィル帝時代の人にして富貴の家に生れ英敏に

して學藝衆に秀で容貌亦婉麗かりければ皇帝の妃を選び給へる時其選に當りて召されたる十一人の處女の中に加へられたり皇帝はカッシヤに近つき之を熟視して其の絶美なるに驚き諸惡は女より出でたりと宣ひけるにカッシヤは面赧めて『善事も亦女より出で候』といひければ皇帝は去りて他の女を選びたりといふカッシヤは己の身を神に献じてコンスタンティノポルの傍に修道院を建てたりカッシヤの作れる「カノン」及び讃頌は頗る奥妙にして就中基督降誕祭の前夜に誦する『アウグスト地に獨權を保ちし時』云々の歌並に受難週間の水曜日に救主の足に香油を沃ぎたる婦のことを記憶して『主よ爾は重き罪に陷りし婦を』云々と誦するの歌は二つながら最も有名のものなり此の後の讃頌には罪人の救主を熱愛するの眞情を顯はすこと誠に切なり

詠歌者と呼ばれたるロマンは多くの讃詞を作れりロマンはコンスタ

ンティノポルの生神女の聖堂の堂役者なりしが謙遜よして且つ主を愛するの心深く終夜祈禱するを以て樂みと爲せりされど書を讀むことを拙かりけれバ堂役者屢々之を嘲笑せり偶々基督降誕祭の前夜至聖生神女之よ現れて卷物を予ふるを夢みたりロマン醒起きて心よ言ふに云はれぬ歡喜を感じたりしが早課奉事の時高座に立ちて歌ふとき朗々なる音聲を以て處女は今永在の主を生む地ハ載せ難き者よ洞を献ず、神使は牧者と僧よ讃め歌ふ、博士は星よ從ひて旅す、蓋し我等の爲に永久の神嬰兒として生るといへる靈歌を謳へり此歌は人々の未だ曾て聞きしおとなき歌なるを以て聞く者皆不思儀の思を爲しけれバロマンは始てその夢みし事を告げたり此時よりロマンは歌を作るの恩寵を蒙りて主及生神女の大祭日大齋期の主日諸聖人の祭日等の讃詞を作れりロマンの世を逝りしハ第六世紀の初なり

第九世紀以後よ至りても聖歌の作られたるものあり又新よ設けられたるの祭日あれども奉事式にハ格別増補せし所なく其の要部ハ變改せられずして正教の露國に傳ハりたる時よハ正教と共よ奉事式幷に聖機密式の既よ一定したるものの之よ傳ハりて露國正教會ハ今日に至るまで之を格守せり且つ聖全地公會幷よ諸聖父の說明解釋してダマスクのイヲアンの秩序正しく編纂したる正教の定理と當時教會諸聖父の尽力よ依りて編纂せられたる教會諸奉事式の秩序を蒐錄せる奉事經ハ悉く露國よ傳ハり而して露國正教會ハ慰藉及び教訓の珍寶として之を確守し世々相傳へて今日よ至れり

第廿一　西羅馬帝國の滅亡幷に基督教が新に興りたる諸國に播傳する事

蠻夷の侵攻幷に羅馬の暴掠に遭ふ事。東西教會の間に於ける差異。新に興りたるの國々及び基督教が羅馬よりして之に傳へる事。佛蘭西。貌利頓。日耳曼

第五世紀の初めに至りフェオドシイ大帝の二子帝位に在りアルカディは東部を統御しゴノリイは西部を治めたり而して兩帝共に當時の如く勢力强盛なる大敵の四方より羅馬帝國を侵せし國家多事の時に際して大帝國を統御するの器に非らざりきアルカディは優柔爲す事なく

寵臣之を奇貨として全く之を籠絡し遂に之を慫慂して異端を保護し聖教會を窘逐せしめ且つゴット人其他蠻夷の民が帝國の北疆を侵せしにも拘はらず之に備ふる事を爲さずして徒らに人民を壓虐掠奪せりアルカディの子小フェオドシイ其位を襲ひしが年僅に八歲幼冲國事を見ること能はざるを以て其姉プルヘリヤ代りて國政を執れりプルヘリヤ年漸く十六歲なるも內は能く國事を攝理し外敵に對して國威を損せずフェオドシイ大帝の皇女たるに耻ぢざる者たるを示せり故に教會にも歷史の上にも永く其芳名を記憶せらる。小フェオドシイは人と爲り柔弱にしてプルヘリヤの監督を受けて教育せられしが其の言と納るゝ間に過なきを得たり時に羅馬國の形勢年に月に益々究しフェオドシイ帝の末年に臨み屢々其境を侵したる獰猛の民グン人に向ひて貢を納るゝに至れりフェオドシイ崩ずるに及びプルヘリヤはマルキアン

を選んで夫となし共に國政を執りしにマルキアン毅然として能く國威を損せざりきグン人の王アッティラ貢を納るゝを促せしよマルキアン泰然として之に答へ『我れ金を以て友人に予へ鐵を以て敵に加ふ』と云ひければアッティラ復た侵さゞ鋒を轉じて西に向へりマルキアンの後任者も亦能く敵を斥けて帝國を保護し殊にユスティニアンの時代（自五百年至五百六十五年）よれ國威大よ揚り人をして轉た羅馬古代の威武を輝かせし時代を追臆せしめたり

西羅馬帝國の困厄を極めたるおと一層甚しく第五世紀よれ全く滅亡するに至れり暗君ゴノリイの時に蠻夷は伊太利を始め日に衰滅よ傾ける帝國の四疆を侵して殆ど寧歳なかりき第五世紀の初ウェストゴットの王アラリフ伊太利の北邊を暴掠し進んで羅馬の城下よ至りければ自負尊大の羅馬人は蠻夷が大膽にも永遠敵よ侵さるゝおと無かるべ

しと思へる羅馬城を脅すを見て驚愕憤怒せしが國家の危急旦夕よ迫るも敢て勇戰奮鬪以て敵を斥んとするの氣風なかりき四面敵を受けたるの孤城糧食竭きて飢餓よ苦みければ元老院はアラリフに講和を申込みたりアラリフは羅馬人の爲す無きを看破して請求すること甚しかりければ使節は驚き『王よ爾の請求する所此の如くんば我等に何を遺し給ふや』と云ひしよアラリフ傲然として之よ答へて『生命のみ』といへり然れども講和の談判遂よ整ひアラリフれ莫大の償金を取りて羅馬を去れり

然るよ此平和久しきを保たず翌年アラリフ復た羅馬城を襲ひ羅馬人降を容れアラリフの選任したる皇帝を公認せしが後間もなくアラリフ復羅馬を圍みて之を陷れたり（四百十年）

アラリフれアリイ徒の迷謬にて壞傷せられたるの基督教を奉じたる

を以て兵士に令して聖堂を毀たず聖堂に逃避する者を殺す事なからしめたれども兵士をして城中を掠奪せしめ奴隷四万人を解放して之を助けしめたりゴット人ハ高樓大厦ヨ火を放ち羅馬富豪の財を掠め羅馬人を虜ヨし又ハ殺せしもの其數を知らず只教會と教會の財産ハ幸ヨして難を免れたり

此時羅馬人の蒙りたる災難實ヨ名狀すべからず富豪の者ハ多く其財産を奪ハれて奴隷ヨ鬻がれ或ハ他國に流浪して食を乞ふ者あり又亞弗利加西班牙等ヨ地面を所有せし者ハ逃れて其地ヨ至れり羅馬を逃れたる者四隣の諸國を始め埃及、パレスティナ、小亞細亞の如き遠隔の地ヨ至りて永遠ヨ保存すべしと思へる大城羅馬の陷りたるを報じけれバ到る處此報を聞て驚かざるなく人皆恐怖を懷けり時ヨ老人イエロニムハウィプレエムの庵舍ヨ居りしが此報を聞くや嘆じて曰く『斯世に

ハ永存すべく見ゆるもの一もあるなし我等若し將來ヨ永遠を有せざんハ光陰の如き何の用をか爲さん凡そ生るゝ者ハ必ず死すべく生長する者ハ老衰せざるを得ず且凡そ人の手にて成す所のものハ光陰の手ヨて亡ぶるハ免れざるの數なり然れども彼の天下の財寶を集めたる羅馬城が敵に陷られ曾て諸國民の母と爲りたるものハ之が墓と爲るべきは蓋し何人も思料せざりし所ならん亞弗利加及東方諸國の海濱ハ天下の大都の堆址より逃れ來れる人々にて滿たされ此のウィプレエムの貧しき旅宿ヨ全世界の最も富める國民來りて宿泊を求むべしとハ誰か之を預想せん嗚呼虛なる哉萬事皆虛なり』

羅馬帝國の衰頽すること實に速にして今日一州を失ひ明日一郡を割るゝの勢なりき、貌利頭よりは兵を引上げて其國羅馬の羈絆を脫しガルリヤ(今の佛蘭西)はゴット人及佛蘭克人ヨ征服せられ西班牙ハウエスト

ゴット人の據る所と爲り日耳曼にはゴットの諸種族絶えず侵入し亞弗利加にワンダル人の占領する所と爲れり當時最も繁盛を極めたる亞弗利加の有名なる教會はアウグスティンの時代ワンダル人よ全く破壞せられて再興するの勢を失ひたりフェオドシイ大帝の時代よ其版圖廣大無邊と稱せられたる西羅馬帝國は大帝の死してより未だ半世紀を經ざるよ伊太利一國に縮少し而して絶えず蠻夷の民に脅されたり皇帝の廢立頻繁なりしを以て帝國を防禦するの力なく蠻夷に貢を納れて之を斥くるを上策とし傲慢なる羅馬皇帝ハ皇妹皇女を蠻夷の將よ嫁するよ至れり四百五十二年民の鞭と呼ばれたる猛將アッティラ羅馬よ來りげれば城中の人恐怖爲す所を知らざりしが「パパ」大レオ出でゝアッティラを迎ひ軍を退けんことを乞ひしにアッティラ直よ軍を還し人皆其事の意外なるよ驚けり傳云ふ羅馬の守護者たる聖使徒ペトル及パウェルは

夢にアッティラに現はれ若し退かざんば死を以て罰すべしと脅せしよ由ると

此後三年を過ぎてワンダル王ゲンゼリフは羅馬を圍みければ「パパ」レオ復た出でゝ哀願せしよゲンゼリフは僅に人民の生命を救ふを約して城中を掠めたり兵士は城に入りて家を燒き財を掠むるよと二週日よ亘り羅馬富豪の財寶、敵國より捕獲せし貴重の物品、基督教會の寶物及び異教の黃金製の神像等は皆ゲンゼリフの本領地たる亞弗利加よ一攫し去られたり羅馬の富貴の人よして暴虐なる戰勝者の奴隸とせられたる者多かりしが其中基督教徒の慈善よ依りて償ハれたる者少からざりき

東部の皇帝ハ西羅馬國を蠻夷の手より救はんと企てたるも其甲斐なかりしが第六世紀の半よ至りユスティニアン始て其目的を達せりユス

ティニアンはゴット人と戰ひ羅馬を回復せしこと五回遂に伊太利に己の權力を固うせり(五百五十四年此後二百年の間ウィザンティヤ皇帝は概ね代官を以て伊太利を治め羅馬は其の四鄰の諸州と共に東部皇帝の管轄を受けたり

ユスティニアンの時代以後歴史家ハウィザンティヤ皇帝を稱して希臘皇帝とす當時羅甸語ハコンスタンティノポルに於てすら尚政府の公用語たりしも希臘語盛んに行ハれて羅甸語全く之に壓せられ東部即ち希臘と羅馬即ち羅甸との區別益々明白と爲り而して兩者の間に於ける交際の薄らぐに隨ひ文化と教會の狀態ハ全く其性質を異にするに至れり其の差異の最も重なる点ハ東部に於てハ全教會即ち信者悉く教會の會員として教會の事業に參與せしに西方に於てハ神品ハ益々此權利を專有せんとし宗教を以て教會に屬する人民を制御するの利器と

爲せしにあり東教會ハ新人種の基督教に歸する者あるときは之に其國語を以て書きたる教書を與へ其國語を以て奉神禮を行ハしめんことを務めしに西教會の宣教師ハ到る處人の了解せざる羅甸語を以て奉神禮を行ハしめたるを以て信者ハ自然聖書に遠かり僅に神品の說教に由りて之を知るを得たり

佛蘭西

ガルリヤハ既にユーリ、ツェーザルの時羅馬に征服せられて其版圖に歸せり始て此地に福音を傳へたる者ハ使徒パウェルの門弟たる聖ルカとトロフィム及びクリスケンティなり大約第二世紀の中葉にスミルナの聖ポリカルプはガルリヤに傳教者を遣ハし其時よりして基督教ハ此地に固定せり聖ポリカルプの門弟ポティンハマルクアウレリイ帝の時ガルリヤに於て他の多くの信徒と共に致命して其芳名を教會史上に

垂れたり第五世紀の頃ゑ至りてゝガルリヤゑゝ既に多くの教會及び修道院ありて其の樞要の都府ゑゝ羅馬より立てられたるの主教ありき然るに恰も此時代野蠻民ゝガルリヤを經て西班牙、伊太利、亞弗利加等ゑ侵入せしを以てガルリヤの教會ゝ其害を蒙れりアリイ教徒なるゴット人ガルリヤの一地方を領せしに彼等ゝ初め正教の主教を冒すとなく主教ゝ依然として意の如く教會の事務を管理せしがゴット人ゝ其地を攻略するに從ひアリイ党の勢力益々強大となり而して正教徒は羅馬「パパ」を以て西方ゑ於けるニケヤ信經の惟一有力なる保護者と見做せり

ガルリヤの他の地方は佛蘭克族の攻略する所と爲れり此人種は偶像信者にして勇武なると共に暴虐狡獪殘忍なりしが聖教の神品輩は之を利用して己の勢力を張り以て異端者の勢力を挫くを得べきを洞見

して之と結托せり是ゑ於て勇猛なる佛蘭克族は其將フロドウヰグの時基督教を奉じて羅馬「パパ」の權威を認めたり

初めフロドウヰグは基督教を奉ぜるのクロティリダを娶りしがクロティリダは之に偶像崇拜を廢して眞神ゑ歸向すべきを勸めけるに久しき間其甲斐なかりき偶ま戰鬪ゑして其軍將ゑ敗れんとするゑ際しフロドウヰグはクロティリダの神若し我を助けて勝を得せしめバ領洗すべしとの誓を爲せしゑ大勝を得たりけれバフロドウヰグ其誓を履行せりレエムスの主教は嚴かに授洗の式を行ひたりしが將軍の例に倣ふて領洗せし兵士三千人ありき主教は羅馬「パパ」ゑ佛蘭克王の歸化せしことを報ト又フロドウヰグは順從の意を表せんが爲め羅馬ゑ豊なる贈物を爲せり

フロドウヰグの後嗣ゝ名のみ基督教徒ゑして其行は依然として野蠻な

りしが能く教會の爲め盡し豊め其捕獲物を分ち與へ其赦罪及び靈魂の救の爲め其の腕力と不義とを以て穢たるの地所と財寶とを教會め寄附せり羅馬「パパ」は其の巧みなる政略と以て能く佛蘭克族を歸服せしめガルリヤの佛蘭克教會ハ西方め「パパ」の權威を張るの一大要障と爲り他の野蠻民族の遵奉したる異端より正教を防禦するものと爲れり而してガルリヤの主教の中に博識高德の人の出でたるめと亦少なからざるを以て第六世紀めハガルリヤの佛蘭克教會は基督教社會め其名最も高かりき

英吉利

羅馬人に征服せられたるの貌利頓は初世紀の頃既め神の言の福音を聞けり始て貌利頓に傳教せし者は東方より至れる人にして貌利頓教會は久しくエフェス教會の慣例を存せり

貌利頓ハ勇猛なる「アングロ、サクソン」人種の權下め制伏せらるゝめ及びて英吉利と稱せられたり「アングロ、サクソン」人は偶像崇拜者にして殊に征服せられたる貌利頓人の他國人種たる有權者め對する敵愾の情盛んなるを以て彼等の間め基督教を播傳すること頗る難く且つ貌利頓人の間めも聖教甚だ衰ひ遂め其影跡をさへ見出すめと能はざるに至れり

第六世紀の末め「パパ」大グリゴリイは英吉利め基督教會を創立せり傳へ云ふ處め依るめグリゴリイ修道士たる時虜めせられて奴隷に鬻がれたるの少年め遇ひけるめ彼等は遠方の嶋より引き來られたる英吉利人めして其國人ハ眞神を識らずと聞きしより英吉利に布教せんと欲するの念勃然として起り自ら傳教者と爲りて彼の國め至らんと欲し先づ英吉利より數人の少年を羅馬に招き之を教育して宣教師隊を

組織せしが遂に「パパ」と爲るに及んで其宿志を實行するの機至り修士アウグスティンを首として之を英吉利に派遣せり

五百九十七年に羅馬の宣教師等ハ英國に上陸し此に其居を定めて國王の愛顧を得るに至りしが其行の敬虔なるより間も無く普く國民の尊敬を得たり傳へ云ふ處に依れば彼等ハ奇跡を行ひ祈禱を爲して病を愈せりと云ふ彼等の傳道を聞き信じて洗禮を受くる者甚だ多く國王も領洗するに至れり國王ハ自ら基督教徒なりと公言せしも臣下必ずしも其例に倣ふに及ばず舊教を奉ずるも基督教を信ずるも隨意たるべしと公布しければ人民の基督教に轉宗するもの日に益々增加し半ば頽破したる古時の基督教の聖堂に於て奉事を行ひしが國王ハ教會に地所を寄附しアウグスティンは「パパ」に布教の効を奏したる顚末を

報道せり此よりして宣教師羅陸羅馬より至り教會ハ英國に堅立固定して修道院起り學校ハ築造せられ基督教の教化國中に遍かりき

日耳曼

日耳曼の或地方に於ハ基督教風に傳播せり三四世紀の頃には既に主教部數箇所にありしが此地方ハ「グン人」「ゴット人」「ワンダル人」の如き野蠻民に常に蹂躙せられたり而して此の野蠻民たる異教徒に非ざれば「アリイ」教徒たりしに由り傳播の日尙淺くして未だ其根を固うせざる基督教ハ彼等の暴虐に對して其の獨立を保つ能ハず第六世紀に至り福音再び此地に傳ハりし時に於ハ古時教化の跡微に存して異教も亦全く其根を固うせざりき

日耳曼の使徒の稱を得たる有名の宣教師をボニファテイと云ふ彼ハ始て此地に福音を傳へたるに非ざるも之を再興固定したるを以て使徒

の稱を得たるなり

ボニファテイハ英吉利ヨ生れ幼より修士と爲り夙に布教傳道の任を盡さんとの大志を懷けりボニファテイ羅馬ヨ至り「パパ」ヨ忠順の宣誓を爲し主教の職ヨ叙せられて布教補助の約を得羅馬を發してレエン河畔のフリズ地方ヨ赴きたり此地方ハ基督教傳播の日淺く異教の勢力甚だ強かりき當所の樞要なる府の傍ヨ樫の古き大木あり雷神に献じたるものとし府民擧りて妄信崇拜せしヨボニファテイ此の神木を斫れり異教人恐怖戰慄して暴人必ず神罰を受くべしと言合ひしヨ數日を經るも其驗なかりければ始めて已の僞神の無勢力なるを悟り爭ひ來りて洗禮を受けボニファテイの斫りたる樫樹を以て一聖堂を造り之ヨ聖使徒ペトルの名を冠せりボニファテイハ之よりして熱心布教ヨ着手しけるヨ「パパ」ハボニファテイを日耳曼全國の大主教の位ヨ進め之ヨ全

教會を監督するの權を授けたりボニファテイ感激して益々熱心鋭意人民を教化し教會内部の紊亂弊竇を芟除するに力を盡し日々説教し諸所ヨ聖堂を立て修道院を起し熟心事に從ふ者を以て之ヨ任じ少年の教育に意を注ぎ校舍を築きしに教授宜きを得たるを以て後ち其同勞者補助者之より輩出せりボニファテイハ絶えず異教と鬪ひ或ハ此世の有司及教會の有權者と爭ひ其の剛毅と倦まざるの熟心とを以て能く百難を排除せりボニファテイの世を逝る時ヨハ日耳曼教會ハ已ヨ全く羅馬「パパ」ヨ隷属せり

前に列擧したる新ヨ興りたるの國々及其他羅馬より聖教を受けたる西方の諸國にハ聖堂築かれ修道院起れり然れども羅馬教會ハ已に岐路に蹈み入り外部の勢力を張るヨ汲々とし福音を傳ひ異教徒を感化するヨハ專ら之を「パパ」の權ヨ從ハしむるを主旨とし而して羅馬教會

の神品に到る處羅甸語を以て奉神禮を行ひ聖書を各國の方言に翻譯するを許さゞりき

第廿二「パパ」の權勢の揚る事及び教會分裂の發端

「パパ」の權勢の揚りたる理由。コンスタンティノポルの「パトリアルフ」フォテイの時教會分裂の端を開く事基督正教のスラウヤン人に傳へる事

第一全地公會に於て當時首要の都府を占むる五大教會主教の權理を確定して之に「パトリアルフ」の稱を付せり此權理に全く同等なるも唯都府の舊き故に由りて羅馬の「パトリアルフ」に第一の「パトリアルフ」と稱せられて首位と占めコンスタンティノポルの「パトリアルフ」を第二としアレキサンドリヤの「パトリアルフ」を第三としアンティオヒヤの「パトリアルフ」を第四としィエルサリムの「パトリアルフ」を第五と爲せり且